

いふにてみかむ九年母の類高直なることおもふへき也蓮根にわさひくはい今日初あ給へ申候

○八日 くもり 今日初あ雨風ともになし

○九日 晴 風なしかゝることこの地にはなきことこのよし江戸の十月頃の如し夕かたより馬場にて乗馬いたす此ほとは谷間に至る少し雪みゆる計也里には曾あ雪なし越路の冬とはおもはれす候

○十日 くもり風なし至る暖氣也四十八度前後也 相川つゝきの羽田の町にて頃日井を穿しにされかうへ出しを井を穿もの密に袖にして海濱へ捨しを子供の打よりて繩へつらぬき百萬遍のまねなし果ては野邊のをくり也とて埋石など建置たり然るに其夜羽田の名主の夢にわれ長く土中に埋れ居しにはからす世に出て回向をも受忝なしと申せし由不思議のことにおもひて心當之事共聞しに前の次第聞出し則其骨を立岩寺といふ寺に葬たりとぞ

○十一日 雪 又寒氣に成され共氷るほとにはなし此頃風少故たらなと多し一尾五六十文位之由よろしき焼物といたし候位のいなた一尾五十文位之由ふりは至るよろし大鱈に而壹貫文位也

○十二日 風雪 昨夜より寒甚し寒暖昇降三十二度に至る寒氣甚寒のしるしより二度尙さむし 佐渡はたゝみのへりより天井のかたへ雪ふるといひしかさほとはあらすされ共椽の下へ一體に雪吹いるゝは相違なし甚敷雪吹の時は中間部屋などにはへりより雪さかしまに降ること必なしといふへからす某か居る所は天井も床も二重にはりありといふ難有も又もつたいなき事也今朝は給人部屋など硯の水こほりたりといふ某か居間は氷なし尤いつ方もいまた手拭などこほりたることなしされ共手水鉢ある邊は薄氷也泉水半氷れり昨夜も九ツ頃まで書物歌などにかゝり居しかあしひゆることはなし在勤にて可歎はこたつを忘たる也居間にこたつもやくからもあれと兼而こたつをやめむとおもひ居し故につくらぬ也

○十三日 風雪 昨夜より寒殊に甚し手拭も手水鉢もなへて氷らぬもの
とはなし二十六度強半迄に寒相成る甚寒より八度尙寒し用人共の部屋
は硯氷るといふか某か居間はすゝりこほらすあさも晝も夜も同じさむさ
也是寒國の故なるへしけさ鍵遣ひしに鎌鍵三度素やり突身貳度六半時過
より五過までに遣ひて漸に汗にしむ位也 けふは煤拂也とて民藏のしめ
麻上下に所々竹をいるゝいにしへは某か單衣に手拭かふりなとして
なせしこと也くれゝも昔わするへからさる也頃日は佐渡も大になれて
よし三年もくるしからぬ程になりぬ是は 君恩を荷ふ故なるへし

吹風のいく重隔しひまもりて聞の燈さそふさむけさ
さむしろのひまより風の吹上て梅とちらせる聞の白雪

前にいふは實事なれと末にいふ程にはあらさりけり涙の瀧つせ血の
杵を漂せし類と御察し候へ

○十四日 風雪 寒甚し氷らぬものは某か居間の硯のみ也手拭なと板の

如くに成る けふ朝劍術を遣ひて向ふ陣屋より歸る時みしに家來共みな
素あしにて雪をふみ勿論稽古著一ツ也全に某は衣類著替けれ共稽古場は
奉行内玄關の向なれば也中々にこたつのこゝろにては成かたき也 土地
のものは昨今は例より甚寒とおもふよし也

○十五日 よほと暖氣に成あられ雨にておりく日かけみゆ例のしくれ
空也此ほとは越後の便たへ御用狀出雲崎にあるよし急用を商人船など聞
参りものかたるのみ 寒暖昇降四十三度に相成氷とけ軒の雪け頻也 月
並の禮を受ること例の如し

○十六日 昨夜よりの雨に氷ことくく解る雪少もなし 昨日こゝ
にて作りたるいもかむを給ておもひ出けるは江戸と違ひて自然しよ多き
所なれはいもよく扱又葛など至るよろしされ共いもをうらこしにする
ことをしらす摺鉢にて摺たるものとみへて豆ほとのかたまりいくらもあ
り是料理の趣はしれ共其事實をしらぬ故也生質のよきものに志ありて

もよき師につかされば存外に笑るゝことある也おもふへき事也譬は徂徠の門の詩人共か力もあり博覧にもあるへきか古詩の法をしらて清人に笑はれたると同じことにもよき師あらされは一寸の茶話にきくことを一生涯しらて過こと多也されはよき先生の弟子共によきものあるも其故なるへし

○十七日 風雨あられ夕より微雪 五時より御宮并御靈屋に参拜いたす天氣都合殊によろし往返ともに風雨なしかさに不及候

○十八日 風雨微雪 けふもちつき也用達方にちつき候あさし越す事也壹石程也夫にちも夫々家來共の遣す間至ち少き先例之由也

○十九日 風雨暖氣也寒暖昇降四十二度也 十月已來越後を御用船渡海なし寺泊に御用狀多たまり居るに又漁人のこときものゝ往來はあれは江戸にて大名の國替ありき鳥居耀藏佐渡奉行被 仰付候ち同人名前之御用狀参り居るなととりゝの說此ほと被行候

○廿日 曇微雪 此ほとこの如くにては江戸より寒少きか如し きのふは七頃より雷雨にてあかり障子におりゝ電のうつり例の大あられふりておそろしきこと也江戸ならば必落雷あるへきか其こと曾あなし田舎は木多く雲あつき故なるへし 御用狀の浮説たることけふよく相分る

○廿一日 風雪寒氣又甚し 一昨日用達ちものより寒氣見舞としてそはくれたり至ちよろし近來は腹すちはり候故そはを多くは給へす然るにこの頃は健なる故子細もあるましやと昔のことく給しに少もあたらす二度給けれとかはらすよほとからたのよくなりしとみへし也

○廿二日 風あられ寒又甚し 昨日正太夫敷を^行りしたりとて申せしは敷内二てう計は十月位夫を段々あたゝかにて末はいつ方もしゆはむ一ツにてことゝくに汗になる也敷内にてかせく人足はまる裸にてとくひもなしと是は地中六十丈位の所也深きは百七十丈にいたる人力にち地中百七十丈も穿ちいるといふこと珍敷場所也

○廿三日 寒暖昇降二十七度に至る火はちにかげ置しもの朝こほり居候
中小性正助少々つよき風を引候而臥り無間もこゝろよくて出勤しぬ其血
色をみるに不宜さて其後もはきくせす此ほともかはらす勤居るなれ
と例の大藏の同症とみゆ某いろく世話し遣しかし羽の鶏など用ちひ
よと申し醫をもかへなとしぬ何卒よくいたし度もの也初に某熱のをひ損
しか勞かとおもひしに何分醫共のさほとに云はす兩三日にはよろしかる
へしとてかく長引ぬ醫は至る多くして病を療するものなき地也京江戸に
行て修行しても官醫を師とせされは土地のもの尊信いたし不申よつて附
子大黃など遣ふ流派のものなし澤根といふ所に傷寒をよくなをす醫あり
てつねに佐州十三萬石に醫壹人半あり一人はわれ也其餘一國の醫ことこ
とくによりて半人也と申せしよし其醫を呼て試みむとせしにこそその秋果
しとそのこりをしき事也かく醫のなき所に而は煩ひてならずと此程の手
當わけて心を用ひ候當冬のことく健成こと曾而近來に覺へぬこと也 新

十郎とところよりしさいもち來る是も先例のよし八ッ給申候 きのふ用達
より歳暮として肴くれ候鯛也くしらさし二尺餘也此邊にては漸二朱位の
ものなるへししけの時はまれに二分位の事もあるよし夫は一年に一度位
のことなるへし都而魚類は江戸の三分一直段也

○廿四日 風雪寒甚し 佐渡の雪は至る細やかにて玉をくたきたるかこ
とし風つよき所故はつかのひまふきいる也けふなどは臺所又は廊下
都而板の間の所はことくくに雪をはきよせておくことよほと也嘉十郎
いふ給人にかし置中間のまくらもとに昨夜よほと雪ふりつもりたりと寒
さおもふへしされ共硯の水はいまたこほらすこたつなけれとよるさむし
とおもひしことはなき也大柴胡給たる夜なと淨手に行こともあれと足ひ
ゆることはいまた曾而おほへ不申候纒なることに而さふらひの部やの硯
も氷らす用人詰所の硯はあつこほり也けさ板の間にて鍵を遣ひしにみち
むのとき雪いつくまでも降こみて某は例を通わらちなるかわらちのう

らへ雪しみ附甚敷すへる也

○廿五日 風雪 兼好かつれく草の體にてもとしのくれは五百年前も足そら様に走りて物静ならぬことなるへし佐渡なとのとしのくれは御用状の日附にておもひ出しはやとしも幾日には也けるよといひぬる計に而御靈屋の參拜を途中にてはるまつ門の飾軒に立懸ある計そ都の様也市中は風吹こと烈敷雪頻なれはいつくも門さして人を作る様もみへすさむしきこといふへくもあらず正月にくるものなけれ田つくり煮敷の子あらふこともあらず御役所は只々くれと正月をかはらぬ浪のよせくる音にのみ聞過しぬることゝおもはれ候けふ市中之貧人共二百人計へ例に而御賑恤の米とらすること也貧ならぬ名のものみてさへも驚かれぬることなればこのさむさにかのさきをりの單衣の膝の半に至れる男女共にきて繩細引なむとを帶として目もあてられぬ様也此國の賤かならはしに而尋問等之時名承りてもかく申す辭書之通なるやいかになと聞てもいらへすることな

きにけふは御惠のほと申聞せしにみな聲を立て難有とはいひきこの國へ來りて賤か答の耳にいりしはけふ計にそありけりものもらひてよろこふは異國近き島根もおなしこゝろなるへし○某か封し文に朱の印をしたることはなきに中番の奴の狀へ某の人の參る御直披あれとの斷書して小なる朱印おしたりおかしき事也またも一笑なるは渠俳諧をいさゝかなして怪しけなる走り書となし奇と稱し可笑は自書もておのか曹司に螻蛄と大書せし額をかけたり周易に尺蠖の屈するもて龍蛇の蟄するとならへ稱しあれは身を抱關擊析によせしもしるへからす某か大公望とせむには相應なるへし近頃承るねきことありて日々に王子に詣つるもの其百日と申日くれに稻荷の行老翁のさき立行をみて弘法大師のことおもひ出てかの前へ出地に手して額つき物申せしにその翁は近邊の槍父にて野よりの歸りなれば狂人也とて驚たるよし女中湯と記せしをみて女中堯舜の類とし街にたちあみかさかふりはやり歌うたひて幼きものに賣與ふるものをみ

て熒惑星の下かいに下りて童謡を教ゆるなとせは大なるあやまりなるへし古に泥みて今をしらする村學究に此こと必なからましとはいひかたき也おもふへき事也 昨今のさむさふらひの部やは二十九度某か居間の椽頬は二十七度いるかわは三十二度いるかわのうちは四十二度なりいまた居間の硯氷たることなしされは某よりよほと末々のものは五段も七段もさむきものとおもひやらされはむこきことあるへき也ひるも朝も夜半もをなしさむさなれは一たひ氷たる手拭のとくることなく次第にいたの如く成りて手拭ふこともならずなる也 才右衛門方々しさいもち來る九ツ給申候

○廿六日 雪風 一兩日已來正助よろし此體にてつゝきなはよろしかるへし當年兩三日の寒氣のときは近頃になしといふされはおもひしほとのことにはあらし

○廿七日 雪風 かく日々の雪なるをこゝのものは大雪なき故に寒甚し

といふ江戸のことくに氷はり霜とけて路に行なやむことはこの地になしといふ霜なくともかく雪あらむにはいかにこゝろくるしかるへき土地のものほほりかほにかくそいひける住ぬるさとの都とはかゝる類なるへ雪もつめてふるにはあらず氷を微塵にせしことを汐風をりゝにさそひふる也雪にてさみたれ時雨をかねたるかときもの百日もつゝけるなるへし

○廿八日 昨夕より暖にてけふは曉より九ツ頃までこゝろよくはれ風もなく雪けに軒の玉水おとつるゝなど都のさまにも似たり十一月廿三日よりけふまでのうちにあかり障子にひかけさしぬることは九日とけふ計也當大晦日より十五日迄之間家來目見より朝夕の料理等迄書付にて家來方伺出るおかしきことにおもひしかは大に笑ひて何にてもよしとて返したり 歳暮の禮受る人數つねよりも多し醫者其外迄ものしめ也家來給人迄同斷也

○廿九日 昨夕より花くもりの如くにて風もなくけふは雨静にふりて氷ことくくきゆる也 前にもいふことく御用狀の渡海たへ果候故十月已來之義曾存不申第一は組頭山本丈右衛門先達を差控相伺候まゝ否不相分候間松かさり等も出來不申氣之毒に候處今日夕方十月已來之御奉書六ツ御用狀箱共一度に相届其内に恐入候義共有之夫々觸達いたし不申候は不相成且は組頭之御褒美も有之候に付七時過を御役所初り其上呈書都る四十通餘明日中に差立不申候は不相成俄に火事場之如き混雜に呈書方は不寢夜通と申候譯に相成

三御親様倍御機嫌恐悅之御事其外入記等之通夫々相届申候
母上様を 思召に御手つから之冬衣被下置恐入難有候私儀朝夕江戸に在着候古き太織に在ひるは新敷を相用候間衣類は曾手を通し不申候品多有之候得共 思召之品故正月に至り候は、慎み著用可仕と奉存候而今日申付仕舞爲置申候

此頃は茶は番茶之外曾給不申候處御菓子被下候間早速家來共打寄候而いたしき申候其節茶給候而久々に在にはな味の味を得候處格別に御座候被下候みかむのりは正月の楽しみに可仕と奉存候
屋敷替も無滞相濟右に付鐵作新右衛門等骨折之義段々忝候
尾崎の伯母御病死之由扱々氣之毒之至小子居り候は、少々はいたし方も可有之歟と別氣之毒に候

此頃日々の修行に少々心くるしき欲心少相成居候夫故給物など之義はとんと心に懸り不申候此體にて江戸にて暮し度ものと心懸候只々日々おそれ入候

君父之御恩難有と奉存候尤日々如斯つゝきはいたし不申候時々存外之案事等有之追而後悔いたし候事も多をろか成事とはち入候
廿六日毎朝之武藝相納申候八日よりはしめ候積に候幸三郎日記并明細書之義忝存候親類書はまた不參候あまりと存候尾崎之義御届書

に叔母と有之右は伯母に可有之候處親類書突合出来不申まことに當惑也百八十日懸り候あまた認出来不申候は一筆三禮を親類書なるへしあたしことはさし置等閑故かゝる差支も出来る也かくは記せしかあとにみれば親類書明細書の控はもち来しか幸三郎の帳面のかたのきたらぬ也

○晦日 くもり けふは蕎麥給るにきのふのわさひのりなど用ひて江戸おもひ出る體也わさひを臭たること半年之内に今日を初とす鼻へ通ること甚しきか如しきのふの呈書けふのうちに果さねはならずとて廿九日の夕よりけふの夜半過るまで呈書のものは少もいねす某かいねしも明かたに成ける

天保十二年正月

○元日 この例にて元日は奉行布衣にて 御宮は詣夫々八幡大山祇へ参り神樂の事ありて此時は組頭のち参る事也御役所は歸り麻上下になるもあり布衣

のまゝなるも奉行の心々に近例布衣な地役人の禮受ること也某はことしは障ことありて 御宮は詣てす

御靈屋もあれと同じ構のうちにおはしませすはかりて不参あしたより麻上下に直に禮受ぬ旅故にことに簡易とおもひしか手輕を好めるはわか僻なれば人にことかくこともなくおこりたらさらむにはとおもひてまかせ置しにあしたに衣あらためてのちのし福ちやとそ重詰例のちちりなどを出し畢て用人祝義を申夫々用人披露にて給人其外さふらひ共出畢て表へ行序に徒之もの目みへいたす也をかしくはおもふなれと禮にあらはとおもひてたへしのひ居し也表の禮ははしめて某かこゝに参りしにかはらす廿九日よりはこと多く又某かみつから筆とりて年賀の狀の端書しるすも多く中々うたよむことは一兩日はならさるへき體なれば口きよめてあらひ面あらひする間に

萬世もめくれる君のさかつきの都をしのふけさのはつ春

たらちねのけさは都に千世経ぬる數ますとしのはるや迎ふる
立歸りきしはつはるもあら玉のひかりをうつせおのかこゝろに
にこりなくひくきに安きわかみつをみなうちよりてくみそあけぬる
あつかれるこゝの島人つとに來てけさあら玉のはるつくるなり
雪のみの島根もけさはあら玉のはるとしはしの朝日かけかな
こゝかしこ松のかさりのかとゆかてことたりかねしたひのはつはる
おもひきやわれにつかふるものもありてはるの壽祝ふへしとは
なとおもひつゝけるまに雜煮出夫よりは又禮受ること年賀のことになり
しかは歌はよまてけふはやみけりけふは朝に雪いさゝふりてくも間より
日かけみへしか又もくもりていとさむし幸ひに風なきのみ 我六朝五代
之盜賊のはつかの人集めて忽に僭上之事共多身を亡すは器の至小なるこ
とを常に笑ひをれば殿さまの御せむのと被申候事を深くおそるれ共遠國
なれば仕かたなく右等之稱今の世の常なるをいたくとかめは又人情にも

とることもある故にこゝろくるしきまゝ捨置ぬ甚しきはとかくに奉行の
ことをカミといひぬ夫はあまりに恐れ多ければおろ／＼に風論し上裁の
字にて正徳に論ありしことなとしは／＼咄し聞かすること也

○二日 雪風なし けふは書院に而昨日當番之もの并部屋住に而御雇御
奉公いたし候もの共御役所詰醫師共之年頭受る畢而廊下に出候水主其外
目見いたし候町醫師共御用達町人共之禮受る廣間役披露也名披露も役名
披露もあり二百人餘もあるへし けふはこゝに而醫師きも入といふもの
三人ありいつれも大島のこしかはり時服風ののしめに而白むくをかさね
著て別段某か居間に出年頭を申す是はきもいりに限候ことにて大に佐渡
に而は高慢にすることのよし也よつて暮も正月もなきかことしと戯に申
せしにこゝも大晦日いつれもいねす元朝もてうちんに而かけ取はくるよ
し申せし也表へ参り候町人共玄關に別段年頭に出るいつれも供のものあ
り内玄關に参る體いつれもあさ上下に一刀は江戸にかはらす乍去草り取

江戸ならば桐油たけの子かさといふへきを非人のかぶり候森田坐いふか
こときなりの花色又はちやの頭巾をかぶりも引に下著は長くいたし
上著計はしをり而主人のかさをあら繩に而からけ首にかけともいたす也
主人もかさなしに而家來は木綿頭巾も一奇なるへし風ある所なれば奉行
の家來にてもさしかさはあれ共用ること少しかるきものは大體すふぬれ
也右さからかさはみせものに而主人も表の往來に而は定而木綿の頭巾な
るへし御かめのかふる頭巾三拾年前迄は江戸に而も小供は多くかぶりた
ると覺へし也

すみなれしの返し

いつか早なこりとそ待あらいそのわひしきおとはすみなるゝとも

來てみれはの返し

まつとしのこの葉にしるわか宿のかはらぬいろの梢ありしと

珍らしきの返し

珍らしき咏島根も海山の日をふりつもる常とはの雪

佐渡のうらのかへし

ことの葉をみかくこゝろももしほ草けふりいふせき佐渡のうらなみ

木からの返し

はつはるの霞鶯たねとしておくりきかせよ花のこの葉

○三日 終日大雪風 風烈敷海あれて浪のおとのみにて雪はたゞいくつ
もなへて白とき風の吹しやおもふ計にて少もみへす花などのことくひ
ら／＼とすることなしけしからぬ咏也さむさ尤甚し今夕かせの吹廻しは
庭のうちも五尺餘とみゆる所あり臺所に雪かきて土手のことくにつみを
く飯をたくもの桐油著て働き候由申出なとけしからぬこと也
○四日 きのふにかはらす雪甚し寒暖昇降器二十三度に至る甚寒より十
一度ひくし

風あらしいそ山の端をのこしつゝ麓は丈にあまるしら雪

夢結ふしはしうきねのひまもりて衾につもる夜半のしら雪
吹おくる雪に竈もうつもれぬ賤はみのきてあさかれいせり
人もしれ秋果しより雪あられ降らぬ日もなきうきたひねとは
はかりぬる器を今はうらむ也なからはかゝるさむさしらしを
汐風の海のえにしにのこし剣硯はけさも氷らさりけり
玉ならぬものとはなき氷哉うきよの外のさむさ也とて

○五日 きのふにかはらす雪甚し臺所のもみのかさにて飯かしく也風
強故雪霜ほとにて真砂地みゆる所もあり板塀白のたすきにやゝ近く成た
る所もありそれは五尺より深かるへし

○六日 けふはこゝの寺院神主より町人座頭迄の禮受ること也寺院はさ
してかはりたることなく神主も是又おなしたゝみ三疊目獨禮或は貳人立
四疊目又は五疊目などもありそれへの辭遣すと一疊すりよる寺院もあ
り廊下の參れば坐頭其外銀山方もの共に名披露役名披露等ことくく

あり夫々地方役所之入口へ參りたち居候而百姓共之禮受る村々名主共御
年頭と廣間役披露するなといとおかし山伏の一刀を帶しときむかけしは
けしほうすに似て奇也玄關へ參り候而年賀也とてほらの貝吹立るは怪し
くもまたかしまし 昨夜四過に筆とり居たるにはしめて硯こほりたりけ
さは筆あらひなと氷たり二十二度のさむさ也かゝることはしめとす
土地のものいふいく年にもしらぬさむさ也と甚寒のしるしより尙又寒き
かたへ十五度よりたり夕かたより又三十六度へかへれり 大山祇と申候
は銀山の鎮主に而江戸の山王とも神田ともいふへきもの也そこには元朝
奉行參拜すること也こゝには昔大盛の時出來たりし金ののへ五幣銀のの
への五幣あり奉行參れば其序に組頭迄は金のかたいたゝかすること也
昔根岸肥前守の時右之幣一ひらかしらの上は落たりとそ其外銀山方大盛
等之はしめ其引受人のかしらへ銀の幣一ひら落れば必其効ありとて大に
祝ふこと也然るにことし鶴子といふ自分かせき引受居る銀山師のかしら

へ三枚までふりかゝりたりされは右之鶴子はさら也そのもの外に二ヶ所の間歩引受居しもことしは大盛なるへしとて相川のもの祝ふこと大かたならず其上三枚に三は奉行之頭字也とて去年よりの大漁大豊作までをいひのしりて佐州のものこの外によろこふ也是にて此國になへて富を突こときこゝろあることを思ふへし吉瑞等のこと喜ふはみな欲深きものゝすること也いくらも吉瑞にほこりて身をほろほしよき夢ありとて富を札をかひ身上をつふすことなとよに多也みなよく深き迷ひを起也

○七日 朝ひる頃々例の風雪に成けふはわかかなの禮受ること也畢而在々の寺院社人すけむ年賀として出るをのか名を披露する時あいといふいらへする寺院もあり布衣にひふとりのかさね附て著し神主もありなかに白むく著し寺院も少しはみゆる也可笑は七草まで並正月十五日は禮として出るものゝ混雜するとて御役所の門外へ供のものおかぬ也佐渡の定役といふもの五十人餘六十人に近かるへしいつれものしめきるもの也のし

めきればこゝの風にて必鍵をもたする也されは御役所外に正月は鍵の五十本もあるよし夫をめつらしとて見物に出るものもあるなど田舎のことおもふへき也こゝにてかた衣きるものにて正月十五日までかた衣夫は羽織なるもあり夫等のかた衣きることの少故にや仕來にあまつのうちかた衣也同心より少立あかりたる使役とて某かかたの中番と同格につきあひ晝めしは中番とゝもに給中々条藏時太郎などは頭のことくに敬ものあり夫等も十五日迄はかた衣のよしされ共七種も具足祝ひの日もかた衣きるといふは江戸になきこと也けふも村々名主等迄の禮受ること六日の如し

○八日 大吹雪 只いつ方も白粉を吹ちらすかことしなにもみへす雪とはいふへからさるかことしけしからさる咏也風甚しく家ゆれて船に居るかことし入側の障子をも吹はつし坐敷にある紙をも吹とはすなとまことけしからぬ風也某か居る所は二重三重に風の隔あるもかくの如し其餘お

もふへき事也

○九日 風雪 けふはよほど暖也とて寒暖昇降をみしに三十一度にて甚寒より尙さむしはしめ寒氣もよも甚寒よりはこさしといひし頃は甚寒のしるにきし日はさむしといひてみなかこちける也然るに二十二度迄にいたりたることありていつしかあらぬさむさにもなれて三十一度もあたゝか也といふことくにはなりてけりされは身はなれぬれはいかよふにも凌かるゝものなれば歎五郎など構へてわれはかくもせりこの上はならぬとおもふへからさる也いつも足らぬこゝろにて身は窮屈におくへきことそかし二十二度の寒になれて三十一度をもゆるみたるとおもふにて平日のこといか様にもなること也既に近き證あり巨たつといふもの用ひし時は一日こたつなき時はこゝろくるしかりしか某久しきおもひにて去年よりやめてけふに成みるになきそひまあきてよき也こたつのは更に忘たり某か酒をやめしも是又同じされはくるしきは十日あまりのことなれ

はよからぬとおもひし仕くせはこゝろ附日こそ良辰なり其時よりやむへきことそかしあさ夕には木もちてきたなしとて塵はらふうちは外目よりは玉のことくにみゆる也をの宿には木はあれとなきかことくこゝろせぬ宿は足もいれられぬことく外よりはおもふ也人も日々身の掃除にこゝろつくすへきこと也其つくしかた前の論とおなしことにて財このめるものゝ今果ぬるに一錢をいとふかことくつむへき事にや

○十日 風雪 寒きのふの如しをとゝ日の大吹雪を

白妙のけふり立けり礮山の雪吹ちらすさとの濱風

初はるも雪吹かせの白たへに霞みてわかぬさとの山の端

佐渡の島沖つ汐風吹あけて海よりそらにおくる白雪

あまつ日のしはしさす間も白雪の風よりふれる佐渡の島山 具足ひ

○十一日 風雪 夕かたより雨に成寒氣四十一度までゆるみ候 具足ひ
らきの祝義あり家來にあつきもちなと爲給候 けふは役替かゝりかへ等

夫々申付るいづれも地役也其始末に寄書院或は御用談之間なと、かはる也

○十二日 風雪 正助段々よろしからすこまりたるもの也けふは當人望こふによりて醫を取かへつかはしぬけふよりふせりしよし也きのふは某の給仕をもいたし候醫師はさして六ヶ敷不申候時かふあたりの類にて追ふき様子勞症たるへしもしるへからすといふ潮熱もなく食物もよろしわかきものなればけふの醫のくすり相應せはすらくとよかるへし

○十三日 風雪 けふ參る醫師のはなしに何年にもしらぬさむさなりといふよつて正助はかねて病ありたるに甚敷成たるもの也とそ正助こと都而こゝろを附候へ上下共に主従は一體也されは正助にするにあらず則某へいたす也某昨年已來幸にして恒よりも健也されはそのかはりとおもひて只々深切をつくし候へと兼あくれくも若きもの共へ申聞置候身に病ことのあるに不實のことゆめくあるへからす若哉某かおもふことくに

せさらむものはゆるさしと迄にいひ聞置候いまた此たひのくすりこの効ありやしれかたし醫師は六ヶ敷は不申候 けふは節分なれはとて民藏の豆まき家來共へそは給うへさせしはかはらねと江戸の節分のことくにはあらずされ共此頃は大になれてうしとは不存候何事も習はしによるものにそ

谷の戸はつもる深雪に鶯のなかくしらしはるの立とも

島根にははるもわたらしふる雪のまた風あらし佐渡の海原

立歸るはるの名たてにもしほくさ筈やの雪の下にもゆ也

軒端こゆ雪にうもれて立春に冬こもりする佐渡の島人

立歸るはるとし聞はまたる也都よりくるかりの玉つさ

○豆まきの事民藏のしめ麻に而某の居間并次を間いるかは計其餘の場所は徒の勤むる也主人につれ用人のつとめもあかりたり絶倒

○十四日 風雪 寒甚しけふはとしこし也とて組頭はきたらす候 稽古

とくにはしめ可申處嘉十郎寒氣によはりたるよし等内々申日延申故無餘
義今少し雪にてもやみたらはとて延しぬ實にまた稽古いたす所に雪ふり
こむも甚し梁かへなとまで雪也と是は戸さしなき所はつかにあるにはや
そこよりふりこむ也

○十五日 風雪 遠在所々々寺社并寺役人之禮受ること例の如し 兩三
日已前也漁師共怪敷海獸を得打殺候百文に賣たるをある醫師の見て壹
分貳朱買たり是は東北海に居るヲットセイといふもの之由生とりにいた
し候はいたし方もあるへきにはや鹽漬にせしよしをしき事也右之時大
騒にて漁師共ヲットキナセと申かけ聲きこえ候由之風聞もあれと無覺束
事共也あたし事はさし置ぬ佐渡の海よりはをりくたいまいと申候所
謂鼈甲に相成候龜あかることおりくあり其時生なから得れば江戸に申
上ること也邊鄙異國近きことおもふへき事也あまりさむさに寒暖昇降雪
鳥越といふ相川銀山の遣しみにしに十八度迄になりぬけしからぬ事也

○十六日 風雪 夕かたより風雪やみぬこゝもはるの遊ひや童のいかの
ほりもてあそぶか風箏の雲井に吟するこれそはるの咏なるへしみとりに
ふちうち廻したるあやあるうちにあかく字を出したりいかのほりは都に
かはらす夕かたを三十七度にさむさ減す

○十七日 大雪 珍らしく風少なし江戸風の雪也とて笑ひき 十五日十
六日は在のもの休なれば相川の出し序に馬やへ來りて馬をみる也別當佐
渡かへへの中間に別當或は火消屋敷の中間は走行こと馬より早し鳥はも
のかはとはわれらかことなりなと大にほりきかせ又重助より兼而其こ
と聞て若き中間の十助か雪中のせめ馬に馬の脇をとも走にはしりはつか
二度に及はて倒まろひ氷に手足破りて別當のことを天神のことく感しい
さや走みせよといふ故別當もいつはりのあらはるへきいとわて火事は雪
中かゝるけしきの時はなき也夫故雪中にはなれでおほつかなしなといひ
てあさむき置もおかし十助か門前のはめつらしかりて見物夥ければ

晴衣なときていつる體也いづれも可笑こと也

○十八日 雪 けふ屏風澤銀山へ例の通參る俊藏歸てのちきしに四人つれ也しかいくたひも雪ふみまよひて深雪のなかにおち入ては互に助あひて今歸りしとなへて五尺六尺もあるへしと深きところは丈餘なることいふにも及はさること也この雪のうちに晴間あれば一しきり宛あられふる也あられば雪のうちはなきものなるかこゝはけしからぬこと也

○十九日 風雪 物ことはなるゝそよけれ彼銀山の敷内は俊藏嘉十郎一度宛入しに嶮岨とも何ともいふへくもあらず危きいのち助りしこゝろにて歸りし也然るに佐渡の廣間役内江清五郎と申候は七十四五の翁にてしはもてつくれるかことき弱々とせし人物也され共此ほとも數十丈の敷内へ安々と往來する也自らいふ敷内へ行はこのいたむこししらすのひて却るあるきよしと十助けふその體をみて歸り舌をまきて某にかたりし也是全習らひ故なるへし

○廿日 風雪 けふヲツト獸差出す腹たち割て鹽つめてあり耳小にひけありて手足尾ありかわうその毛いろにて顔又相似たり手はうさきなとに近くあしは魚の尾に爪を附たるか如きもの也本草綱目啓蒙をみるにヲツトセイは臍肭獸にて和にて右の如くいふは臍ウツを加へいふ也さて又海のかはうそといふものヲツト獸に似たるもの也只獺は上下の齒ひとならひ也ヲツト獸は上齒二並也とあり此たひの大サ貳尺よりよほと大にして又齒ひとならひ也海獺なるへし松前へ行し醫はヲツトセイといふなれと海獺と齒並の相違あるをしらさるか書物のかた誤るか誰にも問ふべきものなしわれは用なしとて下け遣し候

○廿一日 雪 暖氣に少々成四十一度也けふ雪中に獸のあしあとあり狸也犬にはあらずとさひたることおもふへし

○廿二日 雪風 けふヲツト獸の肉を買ひて家來庄助に遣し候是は同人虚勞の故也唐山の抱龍といふ薬もありしか悉遣しぬされ共日ことにか

薄くみゆる也佐渡國內之醫はこと／＼くにみすれと格別にあしくは申さす某か見込とは違ふ也違ひなはこゝろうれしかるへし

○廿三日 風雪 この例にてけふ白洲はしめなり第一に九十歳以上之もの御手當九十五才以上之もの御扶持被下之申渡以上六人あり次に孝行奇特之もの御褒美也是も三人あり 正助七日計いねすこゝろ附居しかけふひる後にわか病かく平愈せり貞助とすもふとらむなといひし只ならぬ體故大勢よりてなため醫師にもみせしに全痲症也とそさりながら又穩になりぬ

○廿四日 風なし少々雪 是等は江戸の晴天よりもめつらしき也去年くれの廿八日々初也 正助の病氣はけふは立さわくことはなじされ共眞疑半なることのみいふよし手足もはれ息つかひあしく言舌もさたかならすされと寝はいたし不申候すはりて火にあたり居る也晝夜よときのもの中番中間貳人侍共貳人宛也みなうちよりてあはれなるものにおもひて給

物なといたし遣す也不便なる體也若萬一のことあらむには亂世のうち死也某にいたすおもひにていたわり候へと一同に申聞置ぬをり／＼本性になりたる時は難有とて泣候由也いとあはれにおもふ也母上より某へ給ひし護符とくに遣せしに先達百日法華とかいふものになりて密に髪のうちきりて日蓮宗の寺へおさめたるよし也

○廿五日 風雪 正助先同篇也 さむけさの冬と同じことのことくけさもおもひしかよくみれば手水鉢もこほらす四十度のさむさ也二十度以上之時にみれば大にゆるみたる也され共日かけみぬと日々の風雪はおとろきおもふ事に候 此ほとは此土地も靜に御用向も段々と御取締附安心いたし候事に候 又さふらひ共に一人も給人立合之外は御役宅之御門之近所迄参りしものも無之候中間共之出歩行不申候と酒なきとさふらひの外出なれば土地にても不審かり居候よし也みな民藏茂兵衛之取締とさふらひ共のおとなしきによりたる故也いまた一度も叱りたる事も無之候

○廿六日 風なし雪少々ふる

○廿七日 きのふより暖氣雨に成 此ほと正助の不快いつれもしてこゝろよからしめむとて此地のきこへある醫はこと／＼にあひて某自ら試み問ひみるにさても片田舎ははかなきものにて是といふへきもの壹人もなし去る頃淳介のきやく煩ひしころ藥をのむこといたくきらひしも宜也のむものまぬもおなしことの藥なるへし某よつて家來にこゝにて大病を得むには手をつかねて死をまつの外あるへからすされは常によく手當して身わつらはさらむ手當こそ第一なるへしといひき某など日々の藥灸少もおこたらすなすは家來など密に笑ふ位のことのよし也

○廿八日 くもり微雪風 よほと暖氣也雪大に消へし也 月次の禮受ること例の如し

○廿九日 くもり微雪 けふは夕かた風少し所々にいかのほりあかりたる風箏のおときこへて大にはるめきぬ 正助こと少々よろしきかにてい

ろ／＼のわかまゝを申し看病のものこまり其上病發已來別れこゝと甚敷なりし故人のこまると追々申出る故病人には某につかふるこゝろへたるへし追而こゝろよくならむには嚴敷しかるへしと申し置ぬ夜中給物こしらへなといたさせ蠟燭の四五丁宛もかゝり炭其外大造にてなか／＼かれかことく煩なはつらきかたかるへしなといふものもありきされ共此程ついでゆることいとふへきことやあるとてつゐえをゝしますよくむたなることなき様にと民藏にも申せし也正助平日口やかましくこゝとをいひ順之助などをそれ居しもの也

○閏正月朔日 風雨 月次の禮受ること例の如しけふにて御用狀三十二日渡海なし 正助よろしきかた也醫は死病とは不申候快ならは高運のもの也

○二日 微雪風あられ 所々浦方々參る役人の相川へ參る時は逢遣して

其地の風俗等聞こと也其内にのほり下り四里はかりの山の麓のものありしかは獸はおるやといひしにいたちの居候と答しかはこの猪鹿狐さへにおらぬ國なれと深山なれば貂の居るよとこゝろへててんの居るならば皮のほしきもの也貂鼠の皮至ちあたゝかにてきて又筆によし朝鮮の筆多く貂毛也いひしに俗間にてんとは申せともいまた年古たるにはあらずかくく^くの毛いろ也といふ申す様よく並のいたちの如くに聞ゆれば尙尋しに家の邊におりく^く出て鶏雀なるとるといふされは常のいたち也けり獸と聞しに貂とこゝろへいたちの話にいたりぬおかしきこと也このものに聞たらむには鳥はといひなははへといふもの數羽出て夏は飯なとりくらふといふへし某こゝのものは末々迄も例を尋し上逢遣せしになかには前後を失ひけしからぬ答せしもあり又耳ふたかりたるかこづくにて何やらむしらすなといふものもあるよし某か前にてもなれぬものはかくの如し人の上たるもの下のものよりこ^こと聞かむにはいかに色を柔らけてものいひよくして聞へきこと也

○三日 微雪夕かたより晴風なしあすは御用狀參るへしなととりく^くの噂也正助同篇也只頻にこゝとをいふとてみなく^く看病人のこまる體也
○四日 風雪夕かた晴 又も雪とは成けりこゝの常のよしなれ共吹雪にはあきるゝ事也

○五日 雨に成珍らしく風少し 正助けふもひるのうちに燈心十二筋までいれて道中の記認候而民藏にしられ候由ととはしらねと病ひにて目うとく成てひるも燈火用ゆるかとおもはるあはれなること也

春雨につもりし雪もやゝ消てあらはれそめし庭の柴橋
をとに聞汐風たへて打しめり佐渡か島根も春雨そふる
春雨のさそひ來ぬらむ咏やる磯山遠く雪をかすめり
はるさめののとけさしらはこし路なるわかなも雪のそこにもへなむ
佐渡の島けふるはる雨瀧つせと雪けともなふ軒の玉水

○六日 風小雨又微雪 明日役替之ものあり某より重立之ものは申渡組

頭より申渡もあり某か申渡の分は五半時を呼出しにあらすは御用ひとあるなどいふ也絶倒いかなればかく仕來しことにや

○七日 風微雪 役替之もの大勢ありこゝにても江戸之如く所々にありくの沙汰あり申渡之始末により歸りにはさふらひつるも鍵持するもある也其内堀口尉之助といふもの實年十八九歳計ものなり是は一國騷動のことによりて親の市太夫關東にめされ牢舎せしと聞て其日より更にの飢食しこの寒國に拾壹にて夜のものもきす夜ふけてひとり雪中にはたし参りなとして神佛にいのりけるよし其時のこゝろをいためけるにてよほとわつらひけるか此程は健に成ける也平日の立居ふるまいは更也何事も行届たる事にあたとへは某か白洲に出る程組頭へしらせむとて椽のあかり障子の外に控居るに外々の子供はみな人のみぬ時なればさむさに手を懐にすることなどある也尤のこと也然るにこの尉之助は少も組頭の前にあるにかはらす手を附つゝしみて居るよし其外人のみるもみさるも少

もかはらす此弱年に君子の行跡のきさしみゆよつてあけもちひし也こは組頭の衆中の見もし聞もせしことにあ某もいろく承りし也こゝの江戸の次には相川なりとてほこり顔にいふこと多くはかたはらいたき事なるにかゝるもの江戸に何ほどあるへしや都なれば多かるへけれとあまりにきかぬ也かくいふ某など當時御騰用にはあつかりたれと尉之助にはちおもふ事多き也尉之助か今の姿もて日々長したらむにはまことの君子なるへし青年のものにしあれば頻に行さきを案しおもふ也歟五郎なと此尉之助か如くならむには某におひて何の望かあるへき才あるものは温順と慎とに足らぬものなるに才もありておとなしく且孝なりと聞へしは可賞こと也夫か弟も孝行のきこへある也 けふ白うさき二ツ持参る一貫文にゑとのへ家來共に給うへさせ某もものせし也白兔はもろこしにては瑞物のことくいふにと家來へ申せしにこれらは眞の白兔にあらず秋たけしよりきつねのこときいろや白くなりて雪中にはいつれを雪とか

り人の尋迷ふことくなるよし夏のうちも白き兎は野にはまれなるものゝよしけふはしめてしりし也されは江戸のとりあきのふ家に白きもまたらなるもあるは珍敷物なるへし

○八日 風雪 又さむさに成る御用狀の來らぬの外ことの葉記すへくもあらず十二月正月の便江戸にいかなることありしやしらす十一月三日に御用狀參り其後十二月廿九日に參りさてけふまで御用狀はこぬ也けしからぬ國也

○九日 くもり風なし こち風のとかにていかのほりの風に吟する聲なと春めきぬこの體にて明日までことなからむには渡海あるへしなとみないひぬ きのふ同心共博奕打十人計召捕來る今日落着申渡す水野正太夫懸也こゝろきゝたる男也

○十日 くもり風なし けふは御用狀參り可申と之事に而一同まち居候處七時頃御奉書貳ツ御用狀四箱參り候而正月廿二日までのこと追々と一

覽所々之書狀數十通に付一兩日は書物歌もやすみと存候今日は珍敷南風にあみな頭痛いたし候由私も少々頭痛せしかかたなと爲打候處忽に相直り候わさひ御菓子等の被下難有候御用狀如山御用多に付菓子等之沙汰に不及いたゝき候まゝ先つしまい候其内大みかむは直に初尾いたゝき候而此程正助不快以外よろしからすみかむの類好み候處更になく今日用達に申付穿鑿いたし候程之事故私初穂たへ直に一ツ正助へ爲持遣し候處頻になみたをこほし候由也あはれなること也其外之家來共には追而菓子遣し候由に而後日のたのしみといたし候家來共おとなしく候故給物は私より家來に遣し候事たのしみに相成別而よろこひ申候舊年來三度の食事之外少ももの給たなくなり申候書物の御かけかとよろこひ候ものくひたきは佛に申餓鬼道なるへし其くるしみを少々のかれ候と存候され共家來共の遣し候時は必一同に而よろこひ候而給へ候間別而難有候 乍序相記し候日本も天竺もからもおなし天地故少々宛の名は違ひ流義も違ひ候

得共おなしみちにおち候事多可有之是神儒佛のおしへのある所と存候おなしみちいにしへもおなしことに候得は 御三親様朝夕御信仰の法華經今の日本へもひろまり候事に候なれ其内にもいかりと欲とはいたくいましめられ候ものにも此二ツありて則法華經に背き候故ほうぼうなるへし子の慈も孫の慈も過ればみな欲に法華にそむくにて衣類のよく居所のよく食物のよく尤法華の大敵と存候この頃は以上之欲は少々減少いたし候歟と存候間私は佐渡へ参り讀之不申法華の信者に成候様に御座候 御三親様は別々御信心の御こと故不信心のわたくし笑奉り候ようのことなくと御笑くさにしるし候

○十一日 くもり夕微雨 春色也

○十二日 くもり 正助今七半時頃死病いたす某か供いたし遠國にて果候上は討死も同前なれば手厚いたし遣候様申付遣す尤今日を三日之間某は精進いたし遣す是は正助のまことにこゝろ計のあいさつ也

○十三日 春雪のとかにふるいそ山打けふるけしき珍らし 正助義今七時葬送てうちん四つ侍等爲連候寺は相川寺町曹洞宗高安寺法名石枕院天外輝昇居士給人并さふらひ用達等供いたす月拜料等附遣す積也母上様御信心の義に付一度題目講被成可被遣候當人百日法華に成候

○十四日 風雨さしてさむからす候 此節魚類多し新十郎へ頃日のわさひ遣し候處ひらめのさしみいたし家内一同に珍らしくたへ候ひらめ一枚は五十文也とそ此程は十六文之かれいにて一度のさい澤山也野菜豆腐のうれ不申ことおもふへし 一同無病也御欠

○十五日 くもり 月次の禮受ること例の如し

○十六日 春雪 池の水全とけぬ けふ死罪のもの二人あり見物夥よし也死罪に申付候旨の申渡せしに忽にこし扱てたゝれす荷ひ参りて切しよし也これは江戸にはきかぬこと也こゝは牛馬の小に力なく人もそれにつれしにや正助か葬式の時の導師を用達共ほこりて袈裟も美々敷焼香又江

戸風也といひしよし焼香に江戸風けしからぬことはさらは出産などにも江戸風あるへきかといひきけふはこし抜たるを聞て新十郎は夫は佐渡風の死様かといひて笑ひし正助か葬式は用達のものも参候出僧も四人ありてにきやか也しと也たそかれにて雨ふりしか例の見物多出て老人などは念珠を出してをかみなといたせしよし也されは遠國にてあまりに手輕にすればはつかしき事ある也挑灯も四ツ其外も右に准してよかりき

○十七日 雪風 けふは正助か初七日の逮夜なれはとて俊藏か料理にてすあえ其外葛かけのひらなとにていろ附の飯たきてみなくゝにふるまひし也あすは某か使者もて代拜あり月々の香花の料など此ほど定てをさむること也民藏よほとの入用と申せしかはされはとよよからぬことに物いはもとよりよろこふへきことかはされともかゝる時にこそ心はかりのことせむとて常に儉素にするにあらずやといひしはさはありかたき事に候とて退けり

○十八日 くもり けふは正助か初七日也あはれ早きものにそ有けり給人其外寺へ参りぬ某か代参のものゝ坐には毛氈なとしきていかめしき様也とそ讀經の僧數人参り立派なる佛事也とそ

○十九日 晴 八ツ時頃までめつらしくくもなし唐山に常に雨ふる所ありて日出れは犬ほゆるといふ佐渡も冬はおさくゝ其ことのおとるへくもあらず半日も日かけみへたること十一月より閏正月迄のうちに四日計なりけしからぬこと也晴候日去月廿八日同九日十一月廿七日同廿四日此外多分ははくもり也されは冬より春に向ひては晴る、日はくもり也されは冬より春に向ひては晴る、日はくもり也されは冬より春に向ひては晴る、日はくもり也

○廿日 春雨暖氣也 今朝迄庭に高壹尺餘に三三四間程のこりたる雪夕かた迄に少もなく消申候 夕かた十三日出て御用狀相届菓子柿等頂戴新右衛門其外之書狀相届いづれも不相替と之事大悦其外に恐入たる風説頻に落涙され共微臣のいたすへき様無之即刻身分相慎精進に尤魚類たうへ不申候とて精進と申譯には無之候間魚類は勿論都あうまきと存候もの

は給不申候積に三度なから湯漬に香物之外は當分給不申候積家來に申付御用向等之外上下一同つゝしみ候積申付候留守宅にも別心附候一一同精進に御信心の法華經にも御よみ萬々分一之御恩を報しのころ可有之候一同少も不慎あるへからす某かかたなとに若哉如何有之候は別不相濟少も禽獸の相違なきものに可有之候間一同格別之つゝしみたるへし是は三御親様御手本出し候一同に爲御見被成候様と存候義に御座候

○廿一日 春雨 つねにかはらす何事も脱ルカいたす只ころくるし

○廿三日 ニカくもり 北海によし島といふ所ありてそのよしは竹よりもふとしをり石州なとに流寄といふ故に定るころにも流よるへしとおもひし故に承候時としくいくらも流寄といふふときはさしわたし壹尺壹貳寸以上なるもありとてけふ四寸はかりにてしなり長六七尺之もの二本をみたりよしといふは世に女竹といふものにおなし姿なるへきに並

の竹のことくいかめしく節立てよしの姿は更になし全の孟宗竹と少もかはらすされ共こゝにては唐よしといふものよし曾論決せず田中從太郎にきしに是は異國より流寄ものに竹之類によしにあらすころの矢からといふ浦へよりしに地名のこときもの捷云々の五字穿附てありきされは朝鮮地方なるへしかしからみなとの類に用ひしや貫の穴のこときもの穿ちしもあるといふ眞竹は大小二重の筋ふしにあり孟宗は一本かと覺たり孟宗竹などの北海筋に弘くならさるうちに見なれぬ節の竹なればよし也と申せしや今この竹の流よらむに誰も孟宗ならむといふは必定也既にけふもきしにこれは何そといふにみなよき孟宗竹也といふ也されはいにしへより唐よしの名あるは解せぬこと也奥羽越後信濃などに竹あるは至近頃のこと也越後には今もなし佐渡より參る也

○廿三日 朝晴夕かた春雨 けふ 御宮并大山祇并八幡の年頭之拜禮として罷出夫々孔廟に參り拜禮いたし同所武藝所にも參りみしに孔廟は十

七史其外書物稽古所に夥つみ重立候役人三人教授目付句讀師等あり十歳より十六七なるも多參り居四書其外をよみ夫を手習し畢り大人は武藝所の參る也武藝所八間計あるへし立派なること也六七人にも素やり鎌鎧の勝負ありき夫を組頭宅に參る組頭麻上下に而出迎いたし奥に通り家内もの共迄にも逢候事例也即日組頭はまた某か宅に禮に參る也是も例也新十郎の御役宅は市中にありけふ某か出門より右を往來途中見物山の如し愚にも又けしからず候子供あとより附歩行牽馬をみて興し聲をあけてほむる也可笑のいたり也江戸ならばひき廻しか氣ちかひかなまよひかいつれかく子供迄附歩行見物によきことはなき也子供はさら也犬までもほゆる也是は陣屋の犬三疋あり前々より奉行を外出にはいつく頃迄も附歩行也出立之時は五十町道十里ある小木の湊迄參り逗留中も附をる也よつて犬の歸にて奉行の渡海をしろといふその犬例のことく附歩行故に町々の犬ほゆるなるへし犬は珍敷ものを吠るものなればかちをたてゝあるくも

のをみてほゆるも是又しるへからず 奉行御宮に正五九月等の拜禮あれは御役所は割休なるかこのほとは至而の御用多故例の通組頭參り黄昏迄居りし也きのふも然り是は此ほとしらへものゝつとひし故也例の通寢起をするなれと正月は日々に二十三十の歌よまぬ日のなかりしかこのほとは一二首位也

○廿四日 くもり 春雨のあとうちけふりなかめのとかにみゆ

○廿五日 くもり 今般人撰にて目付役に成し清水季左衛門は大龜と盃こととして三升の酒をのみたる或はあやしものにてたふらかされし人を救ひしなといくらもはなしある人也其内に浦方の御番所役たりし時在住故相川より引移しに其頃異國船の御備向に而彼御番所役人の住居あらたに移したるよし也然るによるく喜左衛門臥りし夜のものゝ上の老さひたる女來ると夢みて目さめけることよこと也けるか終には現にもみへけりされ共得とためしてのちとおもひて一日二日過けるうちに留守の夕

渡手浦といふ所の御番所也

かた雨戸建るとて喜左衛門か妻の喜左衛門か居間へ行しに小紋の單ものきて細帯しこしより上はけふりのことくこしより下はありくともみへける老婆の居て妻を見ながら雪隠の内に入たり妻は人こちもなく歸り其ことを喜左衛門歸りてのち語りければ喜左衛門の申せしは實は此頃かくし居しかわか顔の色のあしきは彼か故也いかせむとおもふ也其内彌の所見定たらむには仕方もあるへしとて其後はひとり右之居間にいねけりよくみるによことに雪隠のうちより出て障子を明喜左衛門かまくらへ來り何事もせて明かた又歸る也かゝること凡二十三日得とためしてみてある夜障子を明ていり來る所をわきさしにあたしかに乳の下まで切たるかことくなりしか手答もなくかの老婆は障子のうちにいりもせず又雪隠のうちに入るよしある人の語りし也今日家來高村俊藏もて聞しに喜左衛門の答ゆること前の如し喜左衛門の申せしは御番所新につくりたる所幕所に近しおもふにしらすして古墳の上に雪隠を建たるなるへしとおも

ひしかは尋みはやとおもひし内に轉役せしと也尤切られけるのちは何事もなしそれはある人にきしにかゝる化物はふし戸の外におのか草履の左のかたをうらかへし置はいてすと申せし故きりしあけの日に錢もいらす出來るなれば申ことく行かせし故に出さるも又しるへからすと喜左衛門より俊藏の物語せしよし也

○廿六日 くもり風 きのふよりさへかへりさむし初冬のころ雪ふりそめし峰計に少し雪ふりて里はおりく雨也 濫手といふ所におとなしき百姓のありけるか与風行衛しらす欠落せしとも海獸に食れたりともいふ也けしからぬことにて且は御預りの民壹人行衛しれすに成しは恐入たる事とおもひて手をかへて品をかへこゝろをつくして尋しに其村にあやしきの聞えあるものありければ三人迄召からめて尋問ひしにさたかならすこと至るまきはし其内又彼をとひこれを尋ねて疑敷もの貳三人禁獄せしに漸盜して人を殺し遠つ沖にしつめたることわかりし也島國にも又相

應の悪人はありけり

○廿七日 是る雨に而のとか也 歟五郎其外共よくこゝろへ候へばはのそたてたるは三百下ると卑諺有之候此ほとは養實御三父母のおはしませは定而別而御いつくしみ深かるへし夫にあまへ候而三百下り候は、御三方三百ツ、に而壹貫程の下りなるへし御いつくしみは有之候とも心得候而三百文下り無之様心附第一たるへし

こそよりの氷もとけて池のおもにあやをりかくる庭のはるかせ

あらかりし磯邊のなみの白雪もきゆるはかりのはるのうなつら

こし路なる花なき里もはる雨にのとけこゝろの空つありけり

こし路にはみ雪ふる也都なる東のひえは花もみへきに

此ほとかれい至而安し相應の焼物なるへきより大成を十三枚に而百五十文に而買たりと中間いひて壹枚の半を民藏にくれしか一度にはあまりけると也

○廿八日 晴 けふ前の幽霊に逢たりしと聞し清水喜左衛門目通に出しかは聞しに少々相違あり二十三年以前に季左衛門澁手村のうら目付被仰付其頃は獨身に而老母と兩人御役宅に引移し也母は玄關に方喜左衛門は御備の鐵砲等ある所に刀を床に置わきさしを枕元におきてふせし也引越せし日々夜ことに二度三度つゝ何か來りて夜具の上のりたると覺胸くるしく成て目覺たり夜こと故こゝろを附しにはしめ雪隠のひらき戸あく音してまもなくあしをととしてやかて夜具の上のほることたしかにしろ也よつて脇差をとらむとするに手もあしもなへしひれて少も動かす残念におもへともすへき様なし十六夜の間つゝけて如右多時は一夜に五たひも來りたりとそ十七夜の時は手少しのひてわきさしのさけ緒指にかゝりければ力にまかせて引たるにわきさしこゝろと轉ひていたしかたへ鏢のあたりたり然るにいかなる故にや身自由に成たれば起あかりみに白髪ましりの六十計の女細帯に而白地の單物を著たるか喜左衛門か起

あかりたるをみて居なほりて見かへりたる様さしておそろしくもなしな
みの老婆也とそ立て便所をかたへ往かむとする所を力にまかせて切たる
か手こたへもなく忽にひらくと便所のかたへ如往にて行衛もしらす成
たり然るに其後も又毎夜來れともこのたひは少も手足きかぬ故にそのま
ゝに置し也其内澁手村に白杵如庵といふ醫のありて夫に書物をかりみし
うちに板本にて厚きいろく病氣のくすり又はましなひまであり其内襲ウツと
いふ廉ありけるうちに草履のまちなひありければ其ことくにせしに二十
一日夜までに止たりされ共右は深くかくし置たる也其内に妻を迎へて其
妻か喜左衛門を居間に前前に記するかことくなることのありし也され共
女の尙も可恐かと前のことは語らてありける也ある時に當時江戸本郷の
御役所の勤番の山田市郎右衛門は叔父なれば其ことかたりしに夫ををひ
をひに語つたへて某か耳にも入恥入たりといふ尤右の御役所は古墳の多
ある地故にか其後も怪敷ことはあれと喜左衛門かことくなるはあらず扱

又刀に恐れたらむには又と出へからざるに其後も來ること若恐さらむに
は切たるとも逆にも及はすこれはいかにも解せぬこと也其餘は不思議な
ることなしといふよにおとき奉公といふ書ありこの日記は母へのおと
きこゝろ故に怪敷こともありのまゝにかく也怪敷ことはかたるましきこ
となりとて餘人のとかむことなからむことを欲する也おとき反古のおと
き奉公の幼なりし時みし書なれば忘たり怪敷ことにあおもひ出せり西
洋のことは歟五郎學ひもいたし不申候得共され共いかなる取沙汰等ある
とも決あいふへからす其御役にもあつからて西洋のこといひたる林子平
渡邊畢山かことなとおもふへし小學のいましめにも邊防のことはいはぬ
ことはありしそかし

○廿九日 あさは例の風にあしくれの如く村雨ふる

都よりこと國近き島根にはしくれふるなりきさらきの空

村しくれ驚ぬらし梅の花雪にはよしやなれてさくとも

雪解のあとに庭きよめして

これのみの春のなかめそ若草をはらはて賤の庭きよめせよ

うかりけるあしの下をれ枯尾はなはらえはあとに花そまたるゝ

○晦日 晴さむし このほと魚類多し四寸以上のかれい十二枚にて百文なりとそ

○二月朔日 さむしおりく雪ふる こゝにて江戸風なるものは兒のあくるいかのほりと風箏り^{うな}の音のみ也月次の禮受ること例の如し大蛸を退治したる牧野左司馬にけふ逢し序承りしかきしにかはらす江戸にて畫かける蛸の化物のことし眼金色に光り大さ三寸其餘もあるへし頭は至る大なるかほちやほとありたりといかる時は朱のこたく成いろを發せり海底より左司馬をめかけてうかみあかりたる時は緋の衣たる僧の走るかこたくみへたりとそいほのあたりたる所は手はれたりされと一日計に

治たりといひき

○二日 晴寒甚し泉水又氷れり三十四度の寒氣なり けふひらめを買て家來^や遣す丈貳尺五寸餘あり至^ああつき身に^あ二枚におろして煮るとそ代五百文也某はかゝるひらめをみしも初て也味もよろしといひき某は此程精進中に付たうへ不申候

○三日 雪又あられふる風はけし 二三日已來寒氣さへかえり雪にて例の大あられ汐風吹あれて又ももとの姿に成ぬされとも泡雪にてかつそのなかに鶯のなく様はるとはしられけり池のおもの氷のとけもはてぬにあられ打ましりて波のまにく動さまめつらし

しまねなる春をはかくと鶯もなれてなく蘭あられ汐風 鶯のこゝろもしらて玉あられ今きさらきの長閑成日に

松の葉の濱のかたに向ひたるはなへてくち葉の色になりぬ枯るゝかとおもひしに汐風にもまれてかくは成也今にみとりの出へしと地役人のいひ

ければ

常盤なるまつの梢も汐風の更にやしほのいろみせけり

夕日かけうつるとみぬる松かえは汐風そむるもみち也けり

○四日 晴至あさむし三十二度に成 頃日魚の價記せし通なるか組頭に聞に組頭か方の商ふ價は奉行と凡三分の一をたかえり地のものは又三分の一のたかひあるとそこゝの一匁は廿六文なるに以前御徒目付の家來魚荷ひ行をみて價をとひしに十匁といひしかは貳朱につけたるを無餘義さまにて貳朱に賣たり十匁は三百にも遙にたらぬをかくはせし也尤其こと聞へてつくのひたると承る昔より利欲深きくにといふか某の目にはおなしことにみゆる也只奉行の家來等江戸のもの珍敷けしからぬ價を貪る故にかくはいふなるへし江戸ものゝいなかもとて欺は島人の江戸ものとて欺かた少とするへしされ共われは別段なりとて己か智より欺かれたるには大なることもあるそかし人の欺は少なれともをのれより欺かれ

たるは甚敷にいたる也智の弊をそるへきこと也

○五日 くもり さむし此程御用狀之渡海無之に付江戸之様子不相知候落著物其外白洲向相かた附候義に而至る御用多也今日等も白洲の貳度出申候落著物四口有之候

○六日 きのみより少々暖氣に而風よろし 御用狀之渡來まち居候處ひる後に廿一日廿六日之御用狀同月晦日之御奉書共到來同日 大御所様薨御辰被遊候と之御事鳴物普請とも停止之旨被仰下何とも可申上様も無之尤 公方様右大將様には御機嫌不被變候間可心易と之御事も御奉書に而申参り一之安心には御座候得共いかにも 大御所様御事は恐入たる御事閏月七日以外之御容體かとも奉恐察候得共萬一之浮説かとも欲目とやらむにて奉存され共其頃々慎はいたし居候處今日之御奉書今更之様に而只落涙之外可申上様も無之某は 御先代に支配勘定之出役に被 仰付候義はしめにていか成事か事も整不申義を布衣之士に被召加候御事迄は

御先代之 御當職中に其年之玄猪に賜り候 御手嘉珍にそ某か家にてのはしめにはありき其翌年御辭職あらせられければ其嘉珍は世にもなき寶と常に甲冑とにも納置也其のちは 御目見なと月々はなかりしか西丸御普請之事に付殊更之御沙汰共かふり奉り去年七月出立之節も 御前にお近く被召候而殊更之御沙汰共ありき其ときいさゝか御ものこしの常におはしまさぬかことくに伺奉りて長く健に世に被爲在候得と計心に祈り御沙汰之趣難有事におもひ居りしにけふ之被 仰出頻に其時之御姿おもひ出て可申様もなき御事也 御先代様之諸役人にお直話之事長守りともなると承ればあはれ一たひは御直之御物語共同度と常にこゝろにおもひしかおもひし事之かなひてか七月之 御前も被 仰付ける也 兩御所様とももとより露變らせ給ふことはなけれども 上は萬代の御齡に被爲在は運あらむには尙も 御前のあるへけれ共 大御所様の御事は七月後は又も御不出來勝に而表之ものなと殊更の召出しはなきかに承候得は今に

いたりては千金にもかえかたきこととなりけるそいともかなしきことにありけるかく輕き某を御取立ある御恩少も忘れなは人にはあるへからすよつて妻子家來に至るまで少も停止中はさら也よのなかつねの様になるまで人よりも深くつゝしみおるへきことにそ 母上様より之御細書相届難有奉存候此節普請はなされす候得共屋敷は 大御所様より西丸之御褒美にて被下たると思は少も普請などの御心附あらせられすと之御事御尤に御座候 大越より菓子被賜候由難有よろしく御傳可被下候御老人おりゝの逗留等有之様いたし度ものに候一同別條無之と之義大慶に候中務大輔殿之御不快さたかならねとも家來より交通等心得かね候最早七十五歳にかならせらるとおもへは頻にいかと御案事申也家來竹内喜平を兼而御頼之石廻し方之事斷参りたるなとこゝろかゝり也
○七日 くもり けふは昨日御奉書のこと地役人共にお申渡其外江戸之呈書等にてこと多し

○八日 晴風 あたゝか也御凶事に付何事もなふ只つゝしみ居るはかり也 親を切候而逃去候盗人を其子捕へたり子のうけたる疵十五ヶ所深疵六ヶ所也され共死へきほとのことにはあらず親の疵は眉間其外二ヶ所なれ共あさしさとには珍敷勇氣あること也

○九日 晴 此程は漁も天明之御例に寄三日之間漁家に而相休市中は物さひていかのほりあくるものもなしよるは木戸を打而往來なしたまゝ海上に小ふねみゆれば舟を出し候而漁師か否を糺すほどの事也

○十日 晴 西南風に而はるめき申候

○十一日 晴 大にのとか也

○十二日 晴 大にのとか也けふはいさゝか東南風のこゝろにて庭より遠目かねにてみしに冬の海をおもへはまことかと疑ふはかり也山なす雪とみへし浪はいそのまにくはつ花程の咏をのこしみとり成筵をのへたるかことくなるに漁舟花のことくうかみつるも網引も手にとるかことく

みゆ遠沖は能登を越後への船のかよひちなれば帆かけ遙にみへたり咏いふへくもあらず候この島にてはすけとうと云魚を冬よりかけて今も夥とる也その子或は干し或はしほにして大坂より中國へあきのふ也日々の出帆ことに多しすけとうは江戸にていふ小たら也すけとたるといふこしにてはなへてすけとうといふ也佐渡にて國々にも商ふ故に佐渡のたるといふ心にて佐渡といふをすけとうとなまりしや土地にてもかく心得るものもあるよし也かゝる咏にてもおもふ也若哉母上其外之人々とみたらむにはさそおもしろかるへきにと却る故郷の情おこる也昔は北海を乗るもの佐渡と越後の間をのりし也佐渡の名は瀬戸の狭夫故に佐渡の小木赤泊夷などいふ湊はにきわひけるに凡二十年前よりのことの上し佐渡より遠つ沖のかたを乗船多なりて右き湊は大に衰たりちまたの説に松前より東北韃靼の地かたみゆるまでに佐渡を乗こし遠沖をはせてひとまきりに西南へ行は下の關を行也却る危からすといふなつより秋の半末まではよく西北に帆かけみゆる也此ほといまた此海路は乗らぬとみへて西北に帆かけなし梅花はいまた粟粒ほとつほみ也なかゝ廿日も其

餘も過すは咲へからさる也こゝにてとる魚にこゝなこゝといふものあり甚いはしに似たる下魚也漁人か極下さまのものならては食せぬ也是か海上へよる時は水山のことに高くなるよし夫を漁父のみて舟よせてすくひとる也是はほして田の肥し或はしほりて油と成して國々の商ふ也

○十三日 快晴 けふははしめて春霞たちて椽よりみるに相川の町より海へかけうちかすみたるけしきよろしよつてものみに行みるに遠沖に春霞うちなひきて海原へあさ日のかゝやきたる霞のなかをもの見の前をも漁舟いくらも行かふけしきこゝの辨天か崎春日崎などいふ所の春色まで真によき咏にて何もわすれひとりものみに居しに御用狀の参りたる旨を民藏より申聞る間居間歸り候而夫々一覽候先以いつ方も別條無之 三御親様とも御機嫌よくと之御事奉恐悅候其内晦日四日之内四日之御狀に母上より養生之義被仰下難有候專養生仕候此便に友野先生も段々と巨燧其外之事身を大事にいたし候様とこま／＼と被仰下候事 母上と御同

様に而別而難有候某こゝへ参り所々之文通も多候得共教諭のこと有之候は 母上扱は友野先生并林大内記佐藤一齋翁澤村宮門以上之五人ならては無之候いつれも諺にいふ膽に銘したる御事也よつておもふに親族は別段之事餘は書籍之上に明成人ならては異見は容易になしくれぬかとおもひしかは地役人の田中從太郎と申候ものは學者に而詩文もよくいたし田舎風は可有之候得共よほと學問は有之佐州に而漢末に楊震を稱するのこゝとく申ものなれば即刻に居間よひ其こと申聞友野先生之御文通をよみ聞かせさて遠國百里外よりも如此之教諭ある也學者の眼といふものは別段也そこは某か朝夕のこと昨年來日々にもし聞もせし上は定而議すること多かるへしもとより短才不行届なればそはにて日々見たらむにはいふこと尤多かるへし以來はいふもさら也唯今迄之内のことをこ也とおもひしはつゝますにかたり候へ信切なるもの百里の外なをかくの如しといひて深く從太郎にたのみおきたり從太郎はよほと本はよみたる男也君の

喪に居る禮さていつ頃か魚食をたうへ候而可然哉なときいしによく答へ
き序にふち衣の喪の服とすること日本の禮也ふち衣は海士か汐かけ衣な
とに類することにも用ひ貴人の喪にもよみたる歌共多ければ今いふたふ
さよみなとの類にてあらよみの麻なとかと聞しに日本の古きためしを引
さてふちとは葛布に而今も駿河其外の田家に而葛をふちといふことなど
夫々に例を引たり其外先達而如矢卷て懐にするの講義をするを聞しに漢
書を引而蘧伯玉か卷といふに其直こと弦の如しといふより事なきときは
弦まきにおさむるかことくにて弦の直に似たるといひき矢よりの對弦と
いひしもおもしろし母上并友野先生を養生のこと被仰下候間こゝに其ほ
とを記しぬ頃日菜の物給不申候間家來の申にまかせ日々地黄をのみ勿論
桂樹并柴胡の劑をも隔日にたへ灸は三里からかさ脊の十穴とも日々に御
座候多分三百てうより以下なることなし食物も三度のうち一度は汁たへ
申候汁は多分自然薯蕷也其外之もの何も少もたへ不申候菓子も小さく切

たる羊羹三切れ位給候義正月以來今日までに二度有之候今日も家來に被
下候煎餅の初穂三本被遣候干菓子之内ひとつ給あとは組頭に進し家來に
遣候是にて煩候は、いたし方は無之位に御座候湯も月に三度くらひに而
必潮湯にいたし申候先達而之便に記し候尉之助孝行なれと親の禁獄を案
し且は三年の間の精進其外にて體つかれたりと聞て某の筆序に左の如く
記して家來に遣し家來より地役人へ遣し候よし是は尉之助位之身分に而
は奉行を親敷言葉遣しかたければ也

枝折くさと題しぬ

孝は百行のもと、申候得は能孝行に候得は何事も出来ぬと申ことはな
きわけに候其内にも可心得はおのれか身を敬ふ事に候己か身を敬ふ事
のうちに近くはわつらはぬ様にいたし度ものに候孝は力をつくし候事
に而身をいたす事には無之其上おのか身は親の枝に候得は枝のいたみ
候はみきのいたみ候に付親の身といふことゆめ、忘るへからす畢竟

道を二つにいたし候故とし老て不行跡になり親へつかへ候みちをもて君につかへかたく成行候一毛をそこなひ候は不孝なるに戦陣に勇なきは孝にあらずと申教により思へはもとより忠孝は一つのものに付今親へつかへ候心を失はすゆみはり月のたゆまでひかりまさり候ことくせむには末なかくものゝふのみち正敷ふみて日の昇かことくなるへしされはわつらはぬことくするそ孝のみちわけのほる枝折なるへし

右々如く心得居しか大雪中に笠取の山をこへ銀山の見廻に行へくといひしはことは果ねと宜しからすとの先生の御教によりて尙おもへは尉之助へ書遣し書にもたかへるかことし以後はつゝしみ可申大雪中に右々山こへいとつらしとかしこへ行家來常にいひ地役人共も某等はかく辛苦也此こと序もあらは聞え上給へかしなとしはく家來にもいひしよしなれば一たひは其辛苦をもしるへく且は雪中に先年泉本主水正か銀山へ行て役人共の勞を慰しことあるとの例をも聞し故に一たひはいひ出しなれと先

生のことのありかたさにをりかへしおもへは過たるかことくおもひて深くおもひかへし候也 きりほしゆは被下難有候追ゐいたゝき候様可仕候藥灸計に無之氣を保養可仕旨難有候其氣を保養と申候義第一之工夫に御座候得共中々一寸に参り不申候此ほとは庭の雪もきへ候間被出候得共頃日迄は出来不申庭は梅さくも五六本計有之候松の下には水仙福壽草なと有之殊に福壽草はよく開き居候間おりく見申候を慰に相成申候氣を保養と申義六ヶ敷事に遊ひくらし候義氣かりにて却るよろしからす書物を読み武藝さてはむたのかきりに候得共長唄又は謠曲のこゝろにてひまに歌をよみ申候日々夜も遅くあさも早過候義つゝき候時は五六日間位に春來は何事もおき候而暮六くらひより夜明までふせり申候是は保養之様に御座候され共おりく臥り候計にねられ不申候事も有之こまり申候昨年来氣を保養專に心懸候而何事もなくこゝろ安かれといろく工夫いたし居候得共六ヶ敷事に十年も立候は少々は出来可申敷おほつか

なく奉存候され共右々如くいたし候間御安心可被下候在勤は見も聞もせぬことにて却る江戸より心の保養に成候事も有之候得共又不出來之時は江戸のことをおもひ出し候る氣くろうにも相成候され共こゝろをよほとくはり候る氣くろうはなくくらし候様いたし申候昨年頃よりはよほと減申候御安心可被下候兎角に氣保養は宋明儒々書一覽候る人しらす被叱恐入候とあとにて暫こゝろをたやかにて苦しく無之哉と被存候間こゝろのやすきこそ氣ほように御座候間書物は毒には相成不申候御安心可被下候正助哀傷之歌共一覽感吟候 市川はよろしく短冊之禮申通し之事 老僕五助不快と承り候あれは十四五年も奉公いたし候ものに付柔かなるものにも被遣候様いたし度若萬一之義有之候はよく御手當可有之候五助は某か脇坂より遅歸り候時は案事候る不寝扱又おのふに附候る島を市川へ遣し候處島の娘上總にて大病之時其こと島へ咄たらむにはもしや暇にても願可申歎されはおのふか難義なるへしとあの愚直よりまことあれば

こそ其心附ありて島へはかくしたりとそ其身の孫よりも主人之娘を大切に心得候はまことに得かたき老僕也おり／＼考候にさては某はこれにては愚の五助に遙におとりたりとおもひてみつから叱ることもある也某なと五助か忠直にて更に忠直をしらす居る程のまことに一生のうちに成候は、前の氣保養はいくらも出來可申に五助にはつかしきこと多くおもへは恐入たる事にかく被 仰付置候は猶更のわけと存候義に御座候くれくれも五助のことよく御いたはり候様とおもひ候義に御座候老人殊に病氣に候上は酒を被下候るもよろしかるへく候

○十四日 天氣ことよろし鶯其外しらぬ鳥など庭にきなく也しらぬ鳥といふはほう白の類なるへし燕一兩日已來みゆる也いまた船のかよひなし外の國より來にあらることよくわかる也

○十五日 晴 あさ上下著たる計月次々禮もなしけふはわけてのとか成ひる前迄前の山は海より霞かゝりてみねより麓のかた半あらはれたるけ

しき遠沖の船もみへすなりたるなといふへくもあらず次第に甚敷なりてあるひは晴あるひはくもりたるかことくなること二百間前後までおほつかなくなる様霧かとおもへは霧ならず霞のかく也はしらぬこと故白くれといふものゝ海にあるといふに夫かと船かたのものにきかせし矢張霞の深く立にゐこゝには三月の氣候になると長閑なる日にあることの上し也佐渡にてはこれを花くもりといふと江戸のはなくもりとは大に異也きりともやとをかねたるもの也日うけ候て薄紅の如くなる所もある也成程霞なるへしもしほのけふり霞と末はひとしく成なと少もそらことにはあらさる也

○十六日 はれ きのふは晝後より前の山へ人の往來珍ら敷たへすみゆるねはむの日は常に三味線など携山にて遊ぶことの上しされ共此程のこと故つゝしみはつかに老人等の佛に詣る迄の上し也けふ二月九日之御用狀來る鐵作より書狀來る市川よりも相届 母上より之御用狀も來る 三

御親様御別條無之と之御事恐悦之至也 鉄五郎より文章か詩作か日記か此ほとは武藝其外共あるましければ可參とまち居る處近頃會不來如何に候哉病氣歎又はをこたりの病歎いつれにも心懸に候此次之便によく承り度候先達而幽靈に出逢たると申候喜左衛門をましなひの書取寄候而差出す醫方指南大成と申候書也其内寢寢ノ條ニ夜臥禁寢ニ凡臥トキ鞋ヲ以テ一ツヲハ仰ケ一ツヲハ覆ルトキハ魘及ヒ惡夢ナシ起居雜記ト記シアリ

○十七日 雨暖氣 此ほとは海をみるに冬のあれたりしはまことゝはおもはれぬほと静也汐の心はかくなるへきを風の動かすによるものなるへし人もよく風に動かされさらむには心静なるへし

○十八日 雨 ひる頃山より海へかけはつか成隔の梢もみへぬまでに雲おほひけるかしはしに遠山みゆる程になりて北風に吹かえさむし

○十九日 雨風おりくゝあられふるさむし こゝには二月の九日には山の神のいくさする日也とてさまてのことなければまつは山へ行かぬ様に

りたれと可施術もなし人のかの奇應丸くれて用ひしに効ありて治したり
とてことの外喜ひたる様也醫のかたるもいかゝあるへき是に亦も失し庄
助かこと不運なることあはれに思ふ也

○廿三日 晴 十四日出之御用状來る御菓子被下之相届申候庄助之義御
回向被下候次第難有奉存候 今便り村田より歌數多參り申候老人健と相
見艶成歌おかしき事など申參候八十に近き人之氣分驚入候

○廿四日 晴暖氣也六十五度に至る廿日は御出棺と承りてかしこくも手
のもの失ひたるかことくおもひ奉る也嘸哉奥つとめの面々此ほとはいか
ならむなとおもひつゝけ候

○廿五日 晴 天氣ことによし暖氣六十九度迄に至る

○廿六日 晴 天氣ことによし暖氣也兩三日已來日々東南風也俄に梅も
開なるへしけさみれは早きかたはつほみのしろく成たり一兩日には必さ
くもあるへし此草花はいかなるものそとさくに名はしらぬよしなれと庭

のたむほ福壽草のうちに江戸の蓮華草といふものゝ如し多さきたる所は
まさこちの雪のはつかにふりたるかことくみゆる也

見なれつる雪かとはかりしらゝし花めつらしき庭のはるくさ

雁のこゝろもしれとこし路よりはるを都へおくる此花

ようゝに梅もかくなり候今日はしめて火鉢を止申候

いまた銀山へ行みちには少しつゝ雪ありとこゝよりみゆるはしめにふり
しみねはまた雪よほとこのり居る也此ほとは冬よりの汐風にて濱のかた
によりたる風あてつよき所はいつれも松の葉ことゝくにかれたり黄菊
飄零滿地金の語のことく風土によりたるものとみゆる也こゝも冬の汐か
せ強からぬ南受の所はかくはあらし既に庭木のまつは風あて強からぬ故
にみとり也松の常盤ならて葉をかへることなどは珍敷こと也されは菊の
花のちるといふ詩話をもおもひあたりし也

○廿七日 くもりおりゝはる雨暖氣七十度に至るさくらも大いに春め

きたりけさは一二りむ梅ひらきしか夕かたはよほと開たり庭にて家來か
つみつるよめなつくしなの珍らしくおほへて味あり江戸のつみくさはか
くは味のなかりしか此ほと何もくはぬ故なるへしなといひてわらひし夕
かた被下候煮まめ給候其かはり汁はまつ休申候先年當松平肥前守話に同
人七年之間一菜にて汁あれは菜なしと極置たりといひき大諸侯の常時に
かくの如きもありきましてこのほとをや

○廿八日 くもり夜雨 梅ことくく開く所々のさくら開よし梅はけふ
風吹ければちるもありと陣屋は高み故寒氣も常に強きときく春遅きとみ
へたり けふは三ノ日なればあさもしるひるは豆腐のひらあり菜珍らし
くうまさことに覺たりいにしへの人は親の喪に三年のうちは美きものも
うまからすときく日本に追腹を切たる臣も夥ある也さるにわつか三十日
計なにもくはぬとて菜をうまくおもふはあるましき恐入たることとおも
ひぬ精進の豆腐もめつらしければうまさ也常にたへす食好みなとするも

のはなれてこれもかれもといひて終に珍敷ものくらひて歡くことくには
なる也果もなきに至りてはをろか成こと也けふ心附たり

○廿九日 はるさめ也 もや至るふかし來る六日出立にて國中巡村之旨
觸書出す

○三月朔日 曇 さへかえりさむしけふ庭のくさととりて家來共のよりて
團子つくりたりとて某にも物せよといふ給みるに味あり數二十もらひた
り珍敷こと也

○二日 雨 此ほと廣惠倉といふ所へ糶を運也いつれも女共也十町計あ
る所を五斗俵壹俵にて八文宛之賃錢也肴賣のことに付書面をみしに十人
に七八人は女也青もの商人も是又おなし江戸のうら店もの、夫を遣ひて
かみゆひにかみゆはするなとけしからすおもふ也

○三日 晴さむし四十六度に成 けふはのしめは着せしか禮もなし用達

より常は魚類くるゝなれと此節故なるへし竹の子にまことの艾葉いれてつきしもちなとくれたりさくらの葉を一葉つゝもちに附たるしんこありよくみるにさくらにならひてしきみかかしわの葉のときものを附たる也頃日に出之もの歸りて申せしは團十郎かしはらくの晝を表具して正月みき備たる所あり珍ら敷ときゝしにゑほうし着たる人にて太刀はきたる様いさましよつて何かはしらす正月の懸物にせしといひしよし右等いづれも伊勢の御師を生る神のこくひて夫か湯あみせしあとのあか浮たる湯をのむといふに近きまた開けぬところあるなるへし

○四日 晴 庭のさくら少々開申候

○五日 雨 明日は巡村之出立之積之處是に如何哉とこゝろいられ也さくらけさは半ほど開たるに例の風もありぬこゝろにくき事也 ひる後も雨不止延引之義觸させ候この度は鳴物御停止なれば船うたなしされ共船手より差出候間一ツ二ツ左に記す

我戀は春日の山のはつれ雪とけてこゝろのうれしさよ末は目出度のヤレみなどにも白髪はゆるまて

磯邊通れは千鳥かたつたつな千とりよ寄せてこゝろのみたるゝにおもふまいもの身によにこゝろのある人を

みねの小松にひなつるすめは谷のいはほに龜遊ふ

○五日^{六カ} くもり折々雨 けふも又あすの出立はかりかね候いまたさたり不申候巡村は海上をきしにそひ候る船にて廻り候處多候間御船手之もの天氣申出次第にはあすは巡村に出可申候當月の廿日頃に歸り候積に候御中陰中故つねの巡村より都る物こと靜に爲致候尤村方之難義をいとひ候故已前よりは人數も大に減し用人は茂兵衛給人は淳介近習中小性は時太郎鐵藏彖藏貞助に人馬之觸出しを省候間例は給人以下之ものも乗候積りに駕籠をつらせ候得共夫をも省長刀をも爲持不申候尤御中陰中故某は精進に付都る當日之料理向精進也途中の出候は某計之積也こゝ

のくせに而巡村之時は酒など出しさて料理向よからぬ村に参り候は中間并佐州に而雇之ものいたつらいたし候由承り候間右之制禁を嚴敷いたし一汁一菜之外曾而不相成ひるは辨當に而某は焼飯計其外は有合之菜至而手輕にいたし候積尤ひる休之時魚茶并さゆの外決而出すへからすと取極其ことおよび若哉間違不行届之義はゆるし可申候間村入用をかけす疊かへ雪隠之建直等都而もうけ事少もあるへからすと兼而觸出し之外目付役之もの外用に而廻村之度に嚴敷觸させたり土地之ものは奉行之先に而遊山に参り候積に而常に日ようのものなど大勢云々之あるよしの處右之勢ひに恐れけむあまりいひ込之ものなし用達方日傭のものの中には度々参り如何之聞へなどあるものは彼方より却而斷申いれ候而参らさる位にて扱酒をのみ候事嚴敷きらいといふことは相川のものもしりて上戸のものも参りもせずやとひもいたし不申と用達のはなし也右は勿論供方等之義も先例等しらへの上にも文化のはしめ金澤か廻村之例によりたる也在

勤場はとかく御在勤様之思召次第と云様なる仕向に而おもひなる故このたひは一寸しらす並書院へ出るも目付に聞例によりて例なきことはせぬこと、取極候處巡村に料理人之心得或は醫師迄つれたるもありこはけしからすとかの先例追々承り候處簡易之例之段々と長したるかに付近例之内簡易なる例に随ひし也都而金銀山其外之ことに而もこの在勤に新規の工風等少もせず只先例によりたる也され共二百年來の人々定置れたる良法共多ありて中々守りきられぬ也此ほと魚漁多し當年も國地はゆたかなるへしすけとう。こうなこ是はこやに成に而大に利を得ること也壹尺二三寸のますさけに似六十四文位也一兩日已來は庭の咏ことによしさくから四本つはき壹本桃梅李みなさかりにて芝地にはるくさの花たんほすみれなとことくくに咲たり此咏に此山水あり江戸ならば築山に而田かく焼ことあるへしといひき在勤先は食物をいたく身に禁し候事いたさねは夕も朝も其ことにかゝりをりたくなる也某それを深く恐れて飯の外先

つは食せぬことにせしかとそれにてもその何もなき飯を待かこときのこゝろある也小人之間居して不善をなすといふことわか今の身とこゝろに引くらへては日々小人たることをはつること也ひまの時おもふことを段々としらへみるによきことは少くいづれも妄念雜慮といふものにもとは欲より出る惡多くありて深恥おもふ也

○七日 けふ巡村として立出ける積之處きのふよりくもりてけふはいかゝあらむととり／＼のこと故御船手のものゝいふを聞にあすは六日ふを云 けふよりはよろしかるへしされ共風のことはいかゝあるへき必とはいふへからされと雨はあるへからすと巡村は相川より北の方日向行に海濱千仞の岩ほのうへをからく傳ふこともあれば危けれども風あらむには船よりはよかるへしとて彌天氣あしからはも引半てんに出る積にのみのかさなと用意したり是は少々事なれば巡村せぬと村日くゝる頃尙御船手のものよりあすの天氣よしといひしかは彌其積之處曉より雨頻にふり出

此の雪笠取
類にあらし
風波をいと
ひ且は途と
等又は微雨
なすはき
出立すへき
事故也奇なる
好みたるに
あらざる也

しいかなる事かさしての風もあらぬに六半時頃より海上例の大浪になりて白雪の天にさかのほるか如くなるけしきになりて沖のかたはしめ静也ける故あまた漕出ける漁舟こと／＼に逆かえるさま也其上にみる／＼かのかさとり峠のかたは雪ふり出てなか／＼御船を海へおろすへくもあらす某は陸行とも兩三日の間は海上船行へからすとて御船手のものより天氣見損し恐入たるよしいひ出たりされとも天氣見損するは船かたの常ならぬことの常なればとかむへき様もあらねは其こといひて延引觸を出せり嘉十郎銀山は行歸りていふは途中雪みそれふり至るこゝへたりと四十七度迄に成たりさくらのさかりに雪のふるなと北地の故なるへし

みねの雪浪のしら雪花の雪彌生のこしの咏也けり
泡雪のふるにならふなさくら花あきなかりける浪もありぬを

同じなの咏の雪も白浪も花の梢の香はなかりけり
けふ水野正太夫いふなまの椎茸決あくらふへからすこの巡村に其こと家

來へ申付候へとしひ茸は毒のなきものと聞はなまはわけて某の好む也いかにといひしに正太夫か知る人甲州に而檢見に行生椎茸を給へ御代官の手附手代おなしまくらに病ふしたりそれかなかに中間壹人惣身むらさき色にかはりて死せり恐るへきこと也といひき早速に其こと家來に云きかせ某も已來旅行中なと構へて食へからすと定たり佐渡に椎茸あり椎の木よりのみとるとおもひしに栗くの木などの類よりもとるよし也いつれも鬱蒸して生する様にすることのよしされははつ茸なとより毒あるへき也陰氣鬱蒸して生するもの故其氣の變する所に奇毒あることなしといふへからす久須美の話にも岩崎彦右衛門は椎の毒にあたりて即死せしをみてほしたる椎茸を食さりけるとなむわか宅のものもこゝろすへきこと也椎茸毒あること初に聞き故にのちのためこゝにしるす正太夫は煤の入たるをくらひたるよしいひしかふくにも煤をいむよしいへとさにあらす一種の毒あるふくある也されは椎茸もすゝにはあらて一種の氣の變する所よ

りまれに大毒を生するなるへし可恐こと也

○八日 晴 彌天氣と定ければ明日は風なからむには晴雨共廻村として罷出候旨を相觸候

○九日 晴 天氣殊によろし風もなし曉より髪とりあけしのゝめ過に朝餉して相川の御役宅を出る御門内に廣間役共數人暇乞として罷出夫より帶刀坂といふを下り

濁川通を大間町に參り海岸に出る此町之入口に廣間役鐘挾箱に而壹人暇乞として罷出居夫が半町計隔りて山方役其外役々々もの數十人醫師神主御別當等迄町家之軒端に扣居候多暇乞いたす海岸に小はや御舟と申候海船此船上之間と次之間上之間は八疊計其次は八九疊もあるへし其外勝手あり船印等並船こ、乗船也此邊例之通見物夥し千を以數るなるへしこゝより半みち計のり出して常にいさゝか浪立時も見

へかくれする岩共をみるにいつれも築山ほどの大きにて驚かれけり貝を吹候得は漁舟數艘に而船を牽也夫が海岸廿町計の所にそひて漕行也海防のある所うらゝの番所に而小のほり目印たてあり達者姫津北狄戸地炭町戸中村を経て南片邊村にて上陸以上四里半餘海同村水上坊に而晝餉給申

候けふは供立は鍵貳本徒三人士四八用人給人等也目付役磯野新平地方懸頭取
水品孫野袴に先立いたす戸中村に石鐘乳のある岩屋有之候上陸
岩山の直立貳百間も其餘もあるへきみとり成岩ほの裾に穴四五十間もあ
り其内くらくて何もみえず兼差越置たりとみへて銀山大工奥より出て
鐘乳をうちかきたるを籠にいらていたす珍敷といふ迄にてみるへきもの
にもあらず戸中と片邊之間に四十二曲する須坂など聞へたる難所ありと
地之ものはいふ也則家來共内陸より廻しめしに左ほとのことには
あらず木曾の山へ行たる心にては平坦芝地を行かごとくおもひしと
いひき左もあるへし途中之人物夷狄の風今も存せる如し男女更に見わけ
かたし數百人うちよりわか行をおかみ居るうちとよめき笑ふ聲なかに
は女のこへかともおもふもあり此末みなかくの如くなるへし海邊はこと
ごとく奇石怪巖つらなりていふへくもあらずひる前三里計のうちの岩も
圖に出名あるものを數えみしに八十餘あり夫に海岸の嶮岨おもふへし

其外咏ある瀧いくらもあり磯山のかひなとにさくら咲みたれたるなとい
ふへくもあらず四十二曲の邊に山莊太夫か舊跡ありきさたかなること
しらす右之南かた邊村より北片邊村石花村後見村河内村立島村入川村千
本村高下村田野浦村を經北野見村にいたりて止宿こゝにて浦目付役等之
目見あり茅屋の門長屋あるあやしの村役人の宅也され共床に花あり備後
表のたゞみ欄間のくみ物等はありき御治世の御澤なるへしされとも軒端
の化粧たるきに事たらて船板の腐たるなど用ひあり其外のさまひなふり
又驚こと多し小便なき雪隠也御湯の御かんはいかゝなと
いふ風呂の蓋二百年來のものとはみへす

ひまあらしき管屋もはるはたのみあり更にかよへる軒の花の香

このさとも戀はあるらし蟹小船いかにうきねの夢結ふらむ

けふひるの辨當は例之焼飯故別に論なし夜食は村にての料理也兼某は
精進とふれたればひらは芋人參あふら揚しるは椎茸也いづれも好ものな
れと甚味なしよつておもふ佐州の地役人に必人ありて一國を治るには事

足へし然るを某か料理鹽梅のよからぬよりうまくいかなぬ也をなし芋椎茸にも煮方料理かたにて人の賞することもある也されは味あると味なきとはみな料理人の科そかし相構へて以後慎みて佐渡に人少きよ人氣のあしきよとのこといふへからすとおもひ定たりわか此頃食するにたへぬことあれは倉食の稽古として衣類より廁などに至るまで得たへぬことあれは即座に夫に堪忍の稽古と定たれば湯殿にも廁にも何にも少も心くるしきことなし 以前は用達のものを供につるゝこと也さすればそれか休泊の先へ行て何くれと食物迄の世話する事也され共其ものゝ供山駕籠など迄自然百姓のあふらとは成也とおもひ三十年の昔はなき例なれば旁以つれぬ也おもふに以前かの用達か内實仕出しといふものにして利を得しもしるへからさる也

○十日 風雨夕かたより雨止 五時前に北野見村立出石名村小田村大倉村矢柄村五十浦村岩谷口村眞更川村鶴島村願村鷺崎村にいたる岩谷村迄

北野見村を五十町みち三里半に而晝飯岩谷口村を鷺崎村迄三里に而止宿也以上六里半なれ共殊に嶮難之所致十里にも其餘にも向ひぬけふは海上風雨に而船行難成に付俄みちを變候而參り候處駕等に乘候ところ無之半みち程駕に而其餘は悉歩行なる所ひる頃を風雨殊に甚敷さて又道はまことの樵路故其嶮岨にして危難成こといふへくもあらず落葉藤を没するか如き所もあり新にみちを直したるに剛雨之上を珍敷數十人之歩行に而踏ちらし候故田のこときもあり平坦之所稀にあれば砂と石にて眞に歩行にかくまで辛き所いまた聞かす日暮頃鷺崎へ行たりしに上下の勞殊に甚し山水之奇絶は遙に昨日にまさりたり濱邊之岩ほ又是に准すさくらの盛なる所玉椿の數十本さかり成峰等咏もありけれといくたひか倒れむとして其危さいふへくもあらず且大に勞れたれば歌も咏さりけり其岩ほの奇なるといふは仙家の牧羊のことく四五尺六七尺の眞黒に而獸のうつくまりたるかことき岩數百二三町もつゝき續きたるあり柄矢又帝釋天の戰にう

ちたりしつふてもいふへき大岩打ちらしたるか如き所もあり常蓮坊濱には眞黒の基石と脱カ如きものあり眞さこゝには岩の上に人參に似たるくさ生すこゝにも笠取峠といふあり岩谷のほりくたり五十町みち壹里半也南は山北は海なるに實に山削るかことくに千仞のみねの半へ細みちを附たるにて其下は大海也よつて絶頂へ登るとき風烈敷こと甚しけふは此峰にかゝると大雨如傾大風に雲深く四五間の外は少もみへぬ也既に絶てうに某かかふりたるは晴天に可用一文字の菅笠故微塵にもみつふされたりよつて用意の雪帽子をかふり辛く雨を凌きたれとみねを下りたる頃は羽織も半天もぬれぬものとはなくなりたりよほと可恐體なりき又大くら村のはしりといふ所は所謂親しらす子しらすといふにて波の間にはしる故にはしりといふ也絶壁のきわ迄波うちよせる其内を行也扱其はしり二町計を経て岩ほにのほるに岩ほを二尺はかりにみちを附てそこを傳ひ行也某か行うちは人足數十人出てもしや踏外したらむには途中に救

ふ心なるへしみちより下壹間計の所に岩ほに壹人宛ならひて虫の梢に這附たるかことくなし居る也され共下は海に石數十丈なればなか／＼ふみ外したらむには可防様なし幸にこゝは微雨にて凌よかりし也其外はしかけ柄矢なといひて棧道の尤危き所其類けふは奇絶の難所いくらもあり五十浦と岩谷口村の間のみねのおりくちより木の葉石出るいくらも拾願村にさいの河原といふありこゝは石いくらも積あり人ありてことく小田村重泉寺に空海の梵字水有今に水に浮といふ無覺東某か目にはみへぬ也大倉村に梶原平三と今にもいひて景時の子孫也といふ百姓あり豪家也景時の刀を奉行へみする事也太刀拵也二百年前のものには相違なしよき士のさしたるものとみゆる古色至る可愛もの也武州下原の康重か銘あれば永正以後之ものなるへし天正頃いつれにも戦國のものとはみゆる也

○十一日 晴 けふのみちは人足共からみにて參るもよう／＼との義に付如何哉と相談中御船の帆影みへ候由注進有之候間夫々兼あしたくいた

し置候も無間も御船手参り候間出立いたし候積之處二月廿六日三月三日
之御用狀其外御奉書共参り候間先出立差延候も御奉書拜見候處さしたる
事も無之候依之直に出立見立村小浦村此所にも兼るは辨當之積に候得共虫崎
出立九過に成故上陸いたし候計也
村黒姫村歌見村浦川村平松村松ヶ崎村馬首村和木村坊ヶ崎村玉川村北松
村を經白瀬村に至り止宿きのふよりけふの村々佐州中之山中にありけふの
邊は磯山に雪ありて高き山は冬のまゝの咏ひきゝ山は雪村きへて佐州は
さくら多き地とみへ磯山花殊に多し自然のさくら六七本も又は十本も其
餘もまつ其外之木々の間に又雪の村きへたるかことくにさけりけり雪か
くもかといふこと偽ならぬ也大屋形のことくなる御船に漁舟數そうに
靜なる大海を引かせながら磯山の花をみるなど此一事計をいひたらむに
はよきなくさみなるへし

さく花と咏あらそふ越路なる今こむ夏のみねのしら雪

三月十七日は立夏なりといふ故かくは咏せし也

村きへし雪間のこしの山さくらいつれをわけてそれと定めむ

きのふ途中のことを

雨はふるとまりは遠き旅なるもしはし忘るゝみちの邊の花
いくさとゝきくに袖こそぬれまさる雨しのき行旅のころも手
汐風に吹破られてあたらぬ名をそしりけり笠とりの山
行なやむをのかこゝろも大くらのはしりのみちの岩の山ふみ

白瀬村にて所々よりの状ともみて

よきことをしらせのさとにたひねしてうれしくもみるふるさとの文
三月二日附 養御二かた様方之御書難有候御菓子被下候明日船中に
下役共にも遣し候半と別難有候 實母御方より之御文北條に
と安産之由何そ祝ひ被遣可被下候 口にあひ候もの給候と之御事難有
候此ほとは巡村故自然と朝夕は一汁一菜に相成候尤ひるは辨當に梅干
二ツに焼飯と定申候夫をこりへいれ候も爲持候尤家來の辨當は菜の物

上あらめし
中いごめし
下めかつめし
右方言也

をも爲持候これほとにいたし漸と酒又は錢など内々中間にねたらせぬ
様にいたし候義出来候村々に而入用大に減たりと之義喜ひ候而内々家
來に申出候給物悪しくいたせは仇なとせし下さまのものもむかしはあ
りしよし也きのふの泊りに而内々村方のもの、朝夕の給物上中下と出
させみしに上と申候はあらめと草の根と二分に米壹分程を加へたる也
中と申は名もしられぬもくさ共に少々米ませたる也下と申はそはから
とひへの粉のうちへよくみればまことに名はかりほと米を交たる也は
なしの種とおもひ豆ほと給みしにもくさ加へしはのむとを下りしかひ
の方は舌の上ののせたるま、少ものむとにくたらすかゝるもの給候百
姓の割合に而食このみ出来可申哉これをも憐とおもはさるは人間
とはいふへからさる也御家人等著もし給もするものはみなかゝるもの
ゝよりあつめたるあふら絞りて御年貢となせし也しかるを一文たりと
もむたに遣ひよき衣類よき食物にこゝろひかれて何くれと夫而已にか

ゝり居るは 上の御恩もしらす百姓の歎をもしらぬと申もの也歟五郎
なとわかきもの故よく御了簡候へ 大御所様 御葬送の御時 御棺荷
ふもの共其身と或かね出して荷候様大勢ありしよし

國家二百年之 御仁惠 大御所様の 御仁徳難有こと、頻に落涙仕候
其上やさしき町人共之心やと彼等に引競候は、某等はいかゝいたし可
申哉と及はぬこと、恐入候 大御所様の御事はかしこみにて歌も出不
申候三月二日附之御文白玉被下難有候この度の宅にさくら有之候由來
はるはなな可申と楽しみに御座候

こむ春はこゝろして咲さくら花とし隔みるあるしなりぬに
老僕五助二月廿二日病死之由あはれなること也かれか忠義しるして石碑
立遣し度候おさとか歌殊にとゝのひたるかことく聞へ感吟候 新右衛門
より毎度ながら細書縷々忝候其内櫻井生のこと大悦候都筑へよろしく頼
入候 幸三郎が書狀忝候わさひ忝當國めつらしきもの故一本宛玉のこと

くいたし人々に遣し候

○十二日 晴 五時白瀬出立駕に北五十里村椿村迄参りこゝより下乗吉住村を經羽黒村へ参り羽黒山正光寺に參詣常に候得はこゝにてかゝり湯いたし 御宮に拜禮いたす事なれとも此程柄に付拜禮いたし不申正光寺は古跡の大地に在り住持上野へ二十年餘参り居たりと久々にあひなふりなき出家をみたり一體上野へ出家せとり廻しは諸宗にすぐれたる故別あ別段におもふ也こゝにて蕎麥酒もちを出すよし兼あ觸故なるへししんこもちを出せり白雪のことくなるしんこにまさきの葉を附たるもの也味至あよろし此邊いまた甚寒の體也方丈の庭に残雪三尺餘もあり杉の木立見事也こゝは五月雨山といふまことか

年を經て積りし越の湖は五月雨山の森の零か

と爲兼か咏せられし名所也とそこより梅津村を經夷町に至り小休夫あこゝにて晝かれい給候あ同所の御藏御番所見廻り湖水を船にて巡覽きし

のさくらなとよき咏也常にはこゝにて網引かせ獵師にかもなととらせてみるよし鐵砲はさら也網をも引かせす湖水之中央迄乗出せしまゝにて引かへりし也夷町は東南にうみ湖水あり北に金北山あり咏よきのみならず地理ことよろしこゝの本間といふ某か宿せし本陣は則佐州之國主本間か末にて今以豪家也夷町湊町に高百石計に人別三千にあまれり廻船等之入津もなくかくの如しゆたか成ことおもふへき也こゝにてかりかねを聞しかは佐渡へ來り初あのこと故

めつらしくこしに聞也あまつ鴈早都よりかへりきぬらむ

なと口すさみたり折節こゝの定番役昔は夷の町奉行といひし也佐々木紋左衛門参りしかは鴈の珍敷こといひしにこゝには鴈かも共に多しかもは夷邊に春夏共に居る鴈も下中興村には夏もをるといふ

汐のほる越の湖近ければ蛤も又ゆられ來にけり

右之外可記義も有之候得共唯今呈書差立候幸便故今便は文略候

○十二日 御用狀差立候後本陣は本間之類と承る古武具等あらは一覽
 いたし度旨申候處燒失に何もなしとて大身の鍔貳本爲見候銘は朽たり
 戰國のものに無紛見ゆる鞘の古色可愛關之兼常の刀爲見候正真無紛もの
 打に大成しないあり近頃つかませられたるものとみゆ田舎の豪家縉紳家
 の衰たる時よく賣に出るもの也さて又正中建武より應永頃までの古文書
 出し爲見候にいつれも眞物疑へくもあらぬものに手跡等又別段也其内
 興國元年と南朝之年號を用候もの有之貞治五年と北朝之年號なるもあり
 おもしろし五六通は本間某又は佐渡國云々等之義有之別ちたしか成もの
 と相見此家之舊家の證たるへきもの也をり節廣間役露木兵助來ければ其
 こといひてこの頃の梶原平三か宅の下原ものゝ太刀とは大にこと變りた
 るよしいひしに本間か舊家なるよしは夷町にありひ傳へたり且こゝは
 佐渡のうちにては舊家又はもの持多く百石にたらぬ村に二十史凍水
 通鑑綱目通鑑其外書物等多持たるものありかの平三か梶原の末也と云ひ

此所に多
 摩の笛を
 摩のひ床
 ありひ床
 なありひ
 開とあり
 年とあり
 開せし也
 見昨

しは近き事に廣間役永井四郎兵衛か祖父當四郎兵衛六十餘也實四郎兵衛か
 曆前後の頃なるへし頃の平三か名は何といひしや忘れたり顔はせ甚畫ける景時に似たりよつ
 て土地之もの梶原と異名しいつかなへて梶原といひしをよきことにおも
 ひて近頃苗字御免に成し頃より梶原平三と名乗持傳の太刀をも平三か物
 也といふに至るよしある人を志賀團七と異名しかけにては團七々々といひしをその
 下にたつものまことに志賀團七といふ名也とおもひて夫のこと
 は團七の主の開濟玉ひしなと書記して出しけるをその人みて大にかりたりといふこと
 以前きいて其人をみしに其人をみて其名を信したりしことありき夫とはこと相類して是
 としへて名をわすれたり可笑こと也世にあまりに驕奢に長し終に他人の先
 祖を己か先祖のことくいひ段々に甚敷成てまことしやかにするものゝあ
 らさると計もいひかたし若哉あらむには己か親はうへこゝへて路頭に迷
 ふをも捨て人の親に朝夕の手向なすに至る也愚とやいふへき不孝とやい
 ふへきはしめは一時の僞より起りて二代三代の子孫は實事とおもふ也是
 みな父祖の毒の子孫に流れし也

五月雨山に

鳥根のすきみ (天保十二年三月)

外南朝の達
磨日本へ來
り印度無熱
池の水數萬
里をくへり
よ日本へ其
例ふことか
ありいくら
慮を以てし
かたは凡か

此松ヶ崎は
年々潮あけ
て御番所へ
はいし所か
はれり年々
也地りいた
の減るはた
木をあまの
地をさるは
かこまりの
虚變をあら
しすなるへ

草刈の里千
のふのの
いふのの
の所故の
へし順徳
くもしに
草刈の味
尋て來し
とふも駒
なけはる
色の里千
へのの春
とりのけ
しりの也
も強ふ原
歌あり草
大石と羽
本郷迄羽
に過る村
西方村也

は讀たりされは日蓮の深きこゝろをこめて千字文の輯字にて隠語を以消
息ありしも知るへからざる也こゝの尤大切之靈寶に春日大明神の日蓮の
盃こと成たるといふ土器あり至而の古物かけたり様其外盃之臺といふも
の瓦器に而又古色あり六角に而わたり七寸計山水ともいふへき圖ありて
其圖のあひたゞになみと雷文の如きものをいかに至極細密にほりた
る様古色可愛のみにあらず凡作とはみへすつらゞおもふに日蓮在島の
うさなくさめとして神通力にて高麗もろこしより此器をとりよせて盃事
なし玉ひしも是又するへからずかゝること神佛の不思議中々後世よりは
かりかたき不思議共神社佛閣の縁起靈寶等にはあるへからずとはいひか
たき也日蓮は父母の信し玉ひけるとおもひ出て
ふる秋の霜もきへぬるあまつ日の蓮の光なをにほふ也
行ひを本とさきぬる法の華教をのこす古寺そこれ
○十五日 くもり 五時前松ヶ崎村を出て直に船に乗多田村筵場村腰細

村徳和村赤泊村に至り上陸晝休いたし夫々眞浦村柳澤村新保村杉野浦村
大杉村赤岩村野崎村大泊村大石村迄乗船に而大石に而上陸こゝの御藏御
米を見分いたす御廻米懸り之廣間役等出居る也此所之御番所役色砂を一
盆差出こと先例也あかきも水晶のこときもある小石也大石を羽茂本郷に
いたる此村之耕地はうち開けたること也佐州第一之耕地なりと左もある
へし女共泥の如くに相成田をきりかえし居たり羽茂本郷大蓮寺に止宿眞
言宗に而相應之寺也 赤泊湊は三四十町計に成某か船より六七間もある
へし材木のこたく成もの浪にゆらるゝかことしよくみれば大魚のひれと
尾なるへしいくらもあり御船手のいふふかといふ大魚のむらかりて行也
と珍敷覺たり人にもおそれぬにや供ふね其外六七艘の間にくらも尾ひ
れを出せり眞浦村に日蓮の石碑あり上陸せされはいかゝ記しありしやし
らす此處は則世に聞へたる波題目のうかみ出居るといふ所也こゝろして
みしかしらす廣間役山中又四郎先達を江戸に而揚日蓮宗信仰故きしに兼

爲兼流罪之遊
時寺泊之遊
女よみける
よし玉葉集
にありと
物のおもひ越
路の浦に行
波も立歸る
習ひありと
こそきけ

亦信仰のこと故若き時よりしはく行みしに浮たることみしことなし信心のたらぬ故なるへしといひき某は又四郎より信心深きにや既に其半はみたり題目まではみさりしか波をばよくみたりされは半とはいふ也といひて笑ひし也 赤泊村禪長寺は眞言宗也靈寶空海か筆の畫佛二幅いつれも眞黒に亦少もわからす是そ空海のしるしなるへし毘沙門堂大納言爲兼流罪の時持たるといふ竹二本ありいつれも雙生せしもの也きそに浦島子かつりさほといふもの林泉寺にあり是も雙生也てらの靈寶みな此類也書は空海像は空海惠心雲慶といふことつねのこと也まれには外に彫刻もあるへきにや

羽茂本郷村
より小ひへ
迄之内
飯岡
瀧大崎
上川茂
外山

○十六日 晴 五時前に羽茂本郷を出て蓮華峰寺に向ひ行みちの耕地こ
とによし此邊は苗代をまつるや苗代小田には水口にさくらつしなとさ
してゆふのこときものかけしもある也この邊花ならぬ所とてはなしされ
共至亦寒しわた入三ッ胴着に羽織に亦十四五町も歩行せしか汗出ること

下里山
村上山田
小ひへ小
木町迄之内
木野浦
少木村

なし

都すて鴈の歸れるこしなれば行さとことに花さきにけり
打かへす苗代小田の水口に秋かけいのる花たむくなり
春さむみ小ひへの山のさくら花なれて雪かたあやまたれけり

二十町計に亦小比叡山蓮華寺峰寺に至る九拾石之 御朱印に亦當國第一
之大刹也十町計外へ黒衣僧兩人出迎いたす大門之口に香衣著たる僧貳人
出迎いたす其もの案内に亦境内燈明堂其外所巡覽奥之院は行みちは弘
法姿みの水といふより先女人禁制也寺之門口に院代出迎いたす^{住持は}本
堂に弘法大師の額 嵯峨天皇之 勅額等あり庫裏客殿等都亦よろし某を
通せしは上段之間格天井之所也こは先格に亦蕎麥飯強飯酒吸物等いた
す由也 御宮もあれと此程故不奉拜候頃日一菜の外いたす事をいたくい
ましめける故かきのふ役僧伺出たり夫は目付役地方懸り之もの可相伺
と申遣せしに實は伺たりしに某かもしや蕎麥きらいのときあししそこの

誰かいひけ
む
御きらい
かなとい
そはから
引かけて
水品うま
くはむて
くはむて

のある也ふなかりする湊のなかに城山といふ山ありめぐり五百間餘に
 亦直立十九間といふのほりみしにさくら數十本あり植たるものとみゆる也よほとよき
 咏の山也雪月花ともに比類なかるへしとおもはるその城山へ行みちを隔
 て西は内澗東は外澗といふ享和二年の大地震にちうち間の水二丈五尺餘
 減して今はよほとあせ新田など出来たりと今の御番所ある邊はいにしへ
 三百石以上之船かゝりける所也といふこゝに安隆寺といふ日蓮の舊蹟あ
 り日蓮日親の眞蹟深草の元政か眞蹟等あり海にのそみ新敷十八疊の客殿
 次之間附にあよきてら也この寺に蒙古か日本に破船せし時溺死之もの
 菩提の爲とて元朝より贈たりとて唐人之法華經とて聞へたるものありな
 るほと古きもの也表紙等凡ならず手跡も一通りのものにははなし裏書を
 みるに

至元廿二年乙酉五月日特爲因我所傷水陸飛沉一切衆生伏我功德因緣發
 菩提心成等正覺兼及己身現世不逢九橫當生淨土化度群生又願小男大願

至元

右散騎

尚書上將軍廉本

誌

寶體病厄消除壽命延長成就大願一門眷屬消災解厄福壽增延先亡久遠難
 苦生天法界含靈俱霑利樂爾

右散騎尚書上將軍廉本

此二字書判に似たり

されは元人の書たることいかゝあるへし然れ共中々一通のものにてはな
 き也こゝの祖師堂の脇に大木のもみちありめたしことに美敷みゆる也

わか葉より紅葉しぬるはうらなみをかけてはしほに染しなるらし

彌生なるみとりのなかにみちしてはつ花よりもめつらしきかな

羽茂本郷に百五歳の女百貳歳の男あり貳人扶持つゝ被下故目見に出し也
錢壹貫文宛とらせ候其男のかたは召連て出し子八十二歳孫五十六歳曾孫三十五歳に

成といふ親子ともに健にちかの百歳の老夫も小木町迄商ひに今以出ると
 去年より少々耳遠に成たるをかこち居るよしかきりもなきこと也何か手
 業ありやと聞しに飯シヤクシヒをつくることを知るといふ夫もて業とするよしな
 れは 母上は奉らむとて二三本造らせ候積其筋は申聞置たり

山上より多し其外相備中其外相州のありし類道灌山江戸の尋はいくしら佐渡の海地よりみる海上の體と貝と出ることよく符合す也といふ断

○十七日 くもり 小木町より小木村宿根木村強清水村犬神平村深浦村澤崎村に至り晝休同所を白木村江積村田野村木流村大浦村井坪村堂釜村小泊村椿尾村高崎村西三川村に至りて止宿以上不殘船に在海岸見廻り也堂釜邊之沖より佐州をみるに大佐渡小佐渡のわかちよくみゆる也大佐渡と小佐渡の境は海潮通かことくにみゆる也其所則國な筋也竊におもひしは大佐渡小佐渡元二島に在る前之小木のことく變地して間の水淺き所良田と成たるもしるへからす既に塚原三味堂といふ所日蓮のむかし配流の時は海は近かりしか今は遙に隔たり大小佐渡の二島たるは洋中之體に在はよくみゆるなど申せし也問宮林藏之話に唐太とサカリンもと二島にて後年一島に成たるかといひき然るに西三川村に著して澁手村を浦目付よりさゝの蛤などの石に化したるを出せり佐渡には貝のなき國に在る蛤等は北海都少と承るにいつれにあるといひしに梨木岑を穿てはまゝ出るといふ也其所は海へ遠きみね也されは右はいにしへ海底に在る右之小木を以大小佐渡の境を論せしもあなかに捨

へからさるかとおもひし也小木の湊に經島といふ岩あり昔日蓮の赦免狀を日朗携來りて此所にて法華經よみたる所也といふ也これも今は地つゝきの所也 けふの船よりみれば岩水とひとしく海上へ三町も四町もおし出し其うちに築山飛石のことき岩ありて漁父つり垂ておるけしきめつらしくみゆる也尤咏いふへくもあらぬ也

花のちるをみて

ちりかてに花はなりけり眞帆かけし船より早くはるの行らむ半なる彌生のけふに夏たつをいかにしりてや花はちりけむいとさむかりければ

夏立しけふも越路のたひ衣いく重かさねてなをさゆる也

けふの村々
西三川十八枚
田切澤谷
大倉立

○十八日 くもり 五時前西三川村を出ても引半てんに在る笹川十八枚村の金山に至一里餘といふ近しみち嶮岨なる瘠地也金山は相川金山とは更にことかはりたり立殘山峠坂山船久保山といふ金山は砂と石との赤き

山にて小松生居たりそれを段々と穿ちて崩し取る也夫故此邊の山二百年來に大に平坦之地に成たるなるへし立殘山へ行みしに數十丈の大砂山を半は崩し取半はのこしあり立殘山の名是より起るか其殘の所へから堀のときものを附其内および山裾をくわに似たるものに打かきみちに砂をもるかこくとくにしてやりて人を走らせし也水はいかにと役人申せしにこくよしと人足のいひしかやかて譬はなら小笹へあられ村しくれ一時に夥ふりかゝるかこくとく成おとしてそのから堀のことくなるものの上より瀧つせと成て流れ出右之堀は忽に谷川のことくに成也其内にあくわのこときものにあ上を穿ち末へ貳尺計りなる筵をならへて二人して一枚つゝもち其様魚をとるかこくとく成ことをする也さすれば金は筵にとゞまる也其砂を又筵よりなかくほの板へうつし水にあゆり砂金を取る也此所を出る金佐州第一也須叟に五分計とれたり也金計やかて役人にみせはかりにかけて腰なる印籠之こときもの人足いれたり其水源にそひて行みしに大なる池あり

て山谷川をせき入てそれかけし也瀧つ早せと成て流るゝ様すさまじ夫も左右百四五拾間計の谷を行也こゝも昔は山也しな五十年來穿ちとりそこを行こと二丁計にして峠坂山に至るこゝは數十丈のかけをくわにてうかつ也五人壹人たない爺といふもの附て山のそゝけておつる程を見居る也壹間計堀は砂山故山にひゝ入て崩落る也其程をタンナイくといひて附居る也こゝも前に類し山をうちかきてほとよき頃これは山の中ふくより四五丈の大瀧俄におち來りて此瀧口より三四谷川と成て山裾を洗也是を一番流しといふかくして段々と二番三番と流して砂金をとる也以上之仕かた粗前に類す須叟に大瀑布の出來たる様流末に人足の見物して居たるあたりみるゝ谷川と成て驚き迷ひて高みへあかりたるなといとゞ珍敷にと也船久保山是又同しこゝの修験者の宅にあひる休せし也村雨ふ其内に俄にあられに成て頻にさむく成し也こゝより新町迄三里餘也道あしければもゝ引半てんにて歩行幸ひに天氣に成ける也濫手と新町之濱に日蓮こしかけの石と

いふあり其舊蹟に文政度之碑立あり 笹川十八枚村邊は寒つよき所とみへたり漸にさくら開たり

はる遅き里もなか／＼頼みあり今めつらしき花の咏に

けふ途中に晝休いまた四ツ前なれば小休の所に密に辨當にいたしけり例の焼飯をこりに入たるなればいつにてもこまらぬ也召伯程の身からの人三代の頃は甘棠のもとに政を聞たるといふにあらすや今政のことはさて置ぬ某らか巡村とても民の勞すること夥也夫をいとひて辨當にし食物等迄嚴敷せしかと夫にちも勞することは多き也密にきくに入費三分一に成たりと奉行巡村之入用は高割に成こと故一村の一人その身にかゝることは少にち奉行を名として其割元の役人共飲食の費は多也されはありかたきとはおもはぬ也氣受といふことを論せむには却ち村入用の程よく多かたを可悦也され共奉行よりは減することくするかた法なれば減せし也いにしへを以今を論するに民の勞することはこゝろせねは多なる也甘

棠のもとにて政こと聞ほとの手輕成ことは成らぬとも其こゝろはなくて叶はぬ也華美傲奢と御威光といふものは別物なるを知るべき事也いかに華美なることなしたらむとも卑劣なることとして奉行職に似合しからざる寶にけかれ其家來たるもの民のものを取を以其つとめのことくに心得には欲深き商人かあるひは盜賊のよき衣着たるにて大に御威光を損へし下を叱り候と華美を以は御威光却ちいかゝあるべきにや 砂金山よりは石瑛のむらさき成およひ燧石出る也くろ萩枝とくさもあり佐渡に眼あるもの來たらむには眞の珠玉もあるへけれとしらぬは仕かたもなきこと也燧石といふ江戸とは變りすき通らぬ水晶のこときもの也 濫手といふ所は順徳院の隱岐の 先帝を慕ひ玉ひて

いさゝらは磯打なみに事問はむ沖のかたには何事かある

と遊はされしと今も語り傳ふる也それより戀か浦とは名つけしと申也都とはあらてをきの 先帝を戀玉ひし御事そかしこけれ

このいそにおきのかたをそ戀か浦そてぬる、哉君かみこゝろ
歸るてふ名はあたにのみ浪よせていくたひ君の袖ぬらすらむ
立よりていさこと問はむあともなしかひなくよする戀かうら波

あられふりける時

おのかともの雪とはいかに玉あられ深き香ほりの花の梢は
めつらしきいろ香の花に宿かりてけぬともあられいとほさらまし
さく花に驚ぬらし玉あられなめなれつる雪ならなくに

さむけさにわれも迷ひし花の雪あられふりぬを得やはとかむる

○十九日 快晴 至る寒し綿入貳つ胴着二つにて歩行少も汗出不申候

五時より新町を出て眞野村に至るこゝの眞輪寺は 順徳院仁治三年九月
十三日 御寶算御四十六に而 崩御ましませし所といふ眞輪寺の什物は
悉怪敷もの計也眞輪寺を去事八丁計にして竹田村之内に而豎五十間横五
十間の延寶已來之除地あり壹町四方も其餘もあるかことしものさひたる

松林也其内高三尺計に石かけつき廻したる所ありて眞中にとし古たる松
とさくらとありさくらはわか木なれ共松は數百年のものとみゆる也下馬
と記しあるといふとし古たる杭壹本松林の前にあり奉拜もの誰かは落涙
におよちもざきらむかしこさいふへくもあらず候

思ひきや雲の上をは餘所にみて眞野の入江に朽果むとは

なからへてたとへは末に歸るともうきは此世の都也けり

右を御製と語り傳ふる也眞輪寺を 御陵に參るみちのいかにも見苦敷農
家の庭に石抱きの梅といふものあり 順徳院の御手植と土俗は申也いか
ゝあるや否はしらねとも古きことはいふへくもあらずみき四かゝへもあ
るへき也珍敷木也され共わかゝ敷梅也いか也もの成か其石のうちには四
五尺の石碑のときものみゆる也全體はしらす自然之梅の木のうちには籠りたるか
根の邊並三尺計あかりたる所に石ありとみ
ゆる故四五尺とは記せし也只の石かもしるへからされとも高き石にて漸々に梅のみきの
うちにいる様石碑のときものならてはかくは成ましき也武州桶川宿より三里計かと覺
たり在のてらに蒲の冠者のりよりの墓ありこれはさくらのみきのうちへ段々とこもるこ
と此梅のことくおもはるゝ也 御陵はたひのあとにて 御遺體のある所にはあたれとも

さたかならぬこと也此梅のもしや夫等之碑ならぬにみまほしきこと也 萬乗の君の御
牌等に亦農家之塵埃に埋もれむことかしこみて梅のかくはなせしもしるへからざる也
夫々國分寺村國分寺に至るこゝの什物は享祿に焼て 聖武天皇の 勅附
といふ大成薬師の坐像ありいかにも可尊品にみゆ凡物にはあらぬ也こゝ
にて瓦の破れたるを例として奉行に出す也境内の除地のみとはいへ共寺
からよしさすかにそらたきの香ほりなどありき夫々竹田村世尊寺にいた
るこゝは日蓮宗に亦日蓮の眞跡菅家の御筆の法華經などあれともいつれ
もまこと敷ものは少き也小てらにて住持留守に亦院代出しか什物のこと
もしらぬ百姓の頭圓か成ことき僧也夫々阿佛坊村妙宣寺に至るこゝは世
に知る所の阿佛坊村日得并千日尼の居たる所の寺と成たるかに付什物殊
に多し日得千日尼の像は古物可疑ものにあらず日蓮自筆のもの多あるう
ちに唐紙一枚程の曼多羅あり見事いふへくもあらず其上大切に成たるも
のとみへてあまりふるひもせず筆勢等たしかにみへ尤珍物也こゝはよき
寺に亦書院奥の坐敷共あり祖師堂其外回廊續き也辨當所故辨當のあとに

亦珍敷とおもひしもの共取よせみしにいつれも可疑ものにあらず其外日
蓮身延へかへられたる跡に亦千日尼よりけさ其外錢等を奉りし時佐渡に
亦阿佛并尼の格別の世話に成あまの姿を日蓮のおかまれしなといふこと
其外日蓮のいくたひか法の爲に殺されんとせしことなと記せし奉書ほと
ものをつきませて一二と番附をしていろくのことおもひつゝけしま
ゝ記し書簡三卷あり實に珍物也日蓮のけさといふものもありなみの箱に
亦いかなるわけか今の雑巾のことくにさしたるもの也いつれも母上など
御覽あらむに御涙にむせはせ玉ふへき程のものいくらもある也尼并阿佛
か日蓮へつかふる像はいかにもとし老たる夫婦の手にももの携へ杖にすか
り行體にて只うらむらくは後世のものともみゆ水晶の念珠を持たせたるか
おもしろからぬのみあとよき像にて古代のものともみゆる也こゝ
にて辨當仕舞夫々宮浦村慶宮寺へ参るよき寺也佛畫に唐物かとおもふも
のあり夫々長谷村長谷寺へ可行處泊り之宿より又二里餘あり又必行へき

所にもあらず且は御用も出来たれば長谷寺へはゆかて止ぬこゝの旅館にては奇特もの孝行もの古主へ忠義のもの共呼出し銀子とらするもあり鳥目とらするもありき紫ちりめんの幕をしほり庭を白洲體にいたし同心等差出廣間役其外椽頬にならひとらする鳥目を肩へ打かけて引様いかにも戲場などに近し江戸の白洲にはなきこと也けふの村々は長石村四日町村辰巳村下八幡村上八幡村八幡新町八幡町眞野村吉岡村名古屋村大川村國分寺村阿佛坊村竹田村三宮村馬場村北村金丸村金丸本郷寺田村目黒町村安國寺村畑方村畑本郷也 上八幡村に 順徳院の 皇居ましませしといふ也雪の高濱といふ所はこゝ也とそ下八幡村はこゝの松原也 佐渡の在の風呂は湯少しいれて筵を頭をかふりあたゝまる事也今迄は戸たなふろ並の風呂の所計にていり筵をかふるにはいらさりしかけふの旅館はふろも筵も新敷故にはいりみしに風呂の大き程の筵にゑ山岡頭巾といふものゝ如きものを作りふろにかふせある也其筵をあけていり又筵を頭よりか



ふること也筵へ湯氣たまりわらの匂ひの雫顔へたり何分いかぬもの也

陵の古松をみて 君いますむかしを問へは千世をふる松も時雨に枝やくつらむ
末遠くつきせぬうらみ白波のおとうちよするみさゝきの松

上小幡村はこしの松原といふ所にてそは
つ森とも歌まくらにいふと聞しかは

けふこしの松原過ぬ人もみむ相川にやほとはあらしな
歸るさを日ことにまつわかいはそはつ森の名やうらむらむ

賤か家の庭の梅を 順徳院の 御手うへとかたり傳ければ
かしこくも君植しよをあふく哉昔ながらの梅の梢に

九重のかほりはあらし藻鹽やくいふせき庭に咲し此花
上八幡村は雪の高濱といふ所にて 順徳院の 皇居ありし頃杜鵑を聞き召て

なげは聞きけは都のこひしきに此里過よ山ほときき
と 御製ありし故ほときき鳴さりにかそのち日野申納言資朝卿配流の時

と 聞人も今はなきよそほときき誰をしのひて過す此さと
とよみければ今はほときき鳴となむかたり傳ふる也よつてかくはおもひつゝけし

ほとききすなくも鳴かぬもきしははしはの聲の聞かれやはする
ほとききすなくも鳴かぬもきしははしはの聲の聞かれやはする

都路を忍か袖にいしともしとになけとやまつほとききす

雪の高濱にて かこちつる冬よりこしのたひれして名を聞もうし雪の高濱
白たへの磯山のはは夏來ぬる衣やかけし雪の高濱

○廿日 晴 五時畑本郷を出て なむたいの野 にいたるこゝは日朗の日蓮の住居を尋あかしてこゝにて後かけをみて呼かけられるに御教書も

津二塚青瀬水吉吉寺立山龍上田野屋内上穂下皆新ノ十坊小内大宮け
 方濁龍川渡井井野野長江米上野粟新徳下川徳新ノ十坊小内大宮け
 馬場畝寺田下町本寺野下横上釜端湯野澤正善白徳大野小船北武新ノ十坊小内大宮け
 船谷三町安養横谷湯寺生井新代方井粟二三谷河山々

島根のすきみ (天保十二年三月)

五百

ち來しともしらす なむたひの といひてふりかへりみて出島のゆるし
 ふみたることを知られたる所にて今にては開運の所といふ也題目彫し大
 成石の塔ありかゝる類舊蹟此邊至る多し夫々大野村に至るこゝの塚原と
 いふ所に根本寺といふ寺ありこゝは日蓮宗佐渡にて第一の寺也よき寺也
 こゝの入口に三昧堂といふ所ありこれは日蓮配流の時此三昧堂といふ所
 はいはゆる塚原にて牛馬など捨る所に壹間四面之堂ありこゝにて説法等
 ありしよし也在にては死人の焼場の小堂なるへし今も堂のあとには石の階段等附た
 る三重の三四間四面程の石垣にて上に石の塔あり順徳院の御陵より立派其
 わきに祖師堂あり御本丸より内々御納ありしといふ 夫々本堂鬼子母神之堂等あ
 りこゝに鬼子母神の像三體あり内一體頭の上とかたとに小鬼をのせたる
 鬼子母神の像別段なるもの也日蓮十八歳の時の清書といふあり草書至る
 見事なり甚深見新右衛門か書に似たり凡筆ならず日蓮自筆の曼多羅あり
 大幅にて表具の絹と紙中の間に法華守護の諸佛神等を畫かけり墨畫なれ

横谷 中島 新保 西塚 大和 田方 本ヤシ 此多中興 内の珍海 へし

とも至る古く美事也又其一段うちは粟粒ほとこの字に法華經一部を記せ
 りこれをも日蓮の自書と其外之什物はさしてのものなし住僧云きのふの阿佛
 坊一體は寺古くあり三昧堂は右之曼多羅のみなれ共日蓮法華の妙理を徹
 底悟道せし書共あらはせしは此三昧堂に而之事故日蓮宗の根本は此寺跡
 にあれは三百年来かゝる寺とは成たりとよつて妙宣寺ほとこの什物はなし
 といふ日蓮か伊豆へ流され再び佐渡へ流されいくたひか命をも失はれむ
 とせしをもいとす尙妙理を究たるなといともくかしこし此人此心あ
 りて日本へ蒙古の來らむことを前より知りていひしなとは大儒も稱する
 ことそかしはつか一間四面の死馬捨場の辻堂に而も世に法華を弘めむと
 心を勞せしは貴ときことならずやわか 父母の信玉へるも宜ことほりな
 る御こと也然るにいかなれば末世の賣僧そこにはこゝろつかて天下之御
 法度たることを犯し諸宗をそしり偽のことをもを以婦女を欺金錢を欺取
 ておのれか口腹のためにす日蓮一たひかゝる輩をみはかならずそれらの

島根のすきみ (天保十二年三月)

五百一

奴輩こと／＼く七里か濱にて首きらぬには法華の正理也といふへきもし
 るへからす日蓮を學ぶものは第一に日蓮の苦勞を身にふみてせめてはよ
 くを少しく食もの衣類等をよくせむとのことなく孫子にひかされてあら
 さらむ欲心を出すことなからむ様にありたきこと也今近く申さむに公
 儀を大切に重むしなから其公儀にていたすまじきといふ御法度いたし
 なから立身出世を望候ことく東へ行かむとして西へ走ることなく日蓮宗
 の宗旨は法華にて法華には五よくをすれば地獄におつるといふ御法度あ
 る一句にても守りたきことなるへしこの根本寺に在り洗米其外共出せり
 先例也夫等は此次にたよりに奉るへし御信心あるへし信心は心をまこと
 にするといふ字なりされはましりなしに法華のことを信じ申さすては信
 心にはなりかたかるへし夫々清水寺に至る本尊の觀音は秘佛と申す故に
 みすねはむ像によき品あり胎そう金剛二かいの圖ありよきものとみゆれ
 と古物にてしれかたし夫々上中興村本間西蓮寺に至る住僧をみるに品格

本間西蓮寺
 といふこと
 松平西福寺
 の類なるへ
 しこの寺に
 あり先例に
 するはさし
 すの園子を出

よし佐渡のてら／＼にて奉行參れば地上に平服するも足の甲に手を附て
 立ながら出迎するもありこゝの住持少々並より頭高し役僧兩人召連出た
 り武家の子也とおもひしによく聞は東派之一向宗に在りこゝの昔國主たる
 本間か子孫也といふあらそはれぬもの也こゝにも日蓮より本間へ與し曼
 多羅又は北條家より本間之御教書等あり東照宮の御書と申候ものも
 ある也傳來覺束なしこゝには必古代之武器あるへしとて聞しに太刀鎧甲
 冑等先祖の持傳ありしか三代已前之住持へ其時之奉行より所望にて奉り
 今はなしとて蒔繪の古くら一つみせたりよきものとみゆる也一國之奉行
 故さもなくばはならぬなれと本堂へ行みちのうは草りを立派なる僧の手
 つから直せしもありき根本寺なども中門の外に送迎上下坐也奉行は駕之
 内に戸を引かせ候計也

けふ濱邊にては冬にみしほとならなくも沙風に磯邊あまきる佐渡のしら波
 夏もななこゝに住けり鴈の名は都なる旅になくらむ

ふちかれのけふりなからの橋ならてむかしかはらぬ鴈のふるさと

中興の鴈のことは十二日の日記にもいふかごとく故かくは咏せしかなを
いかなる所に居るやらむとて村長に聞せしにやゝしはらくありて鴈は秋
の彼岸に参り春のひかむには歸るもの故此ほとはをり候はすといひ出た
りそはたれも知たることなれとこゝの鴈は既に佐々木彌左衛門かかくと
いひしといひて聞かせしにけしからぬ顔して尙尋へしといひて入けるか
其後何ともいはす彌左衛門はあやまりみたることいひしや聞し村長かこ
ゝろなきにや名所舊蹟等にかゝること多かるへし

はなのちるをみて 人しく花をあやなく霞かくせしもいつしかさそふはるの山かせむ
人しらすちりぬる花は山かせにこゝろやすくや身をまかすらむ

花のさかり成里もありければ 山風にかたもさためすちり行しやとりかこゝの花の
ひともと

○廿一日 晴 西蓮寺に 東照宮の御書ありかゝり湯いたし今朝拜見い
さと人のこゝろいられもおもほゆるちるやちらしの
花のなかに

たす傳來さたかならす其外拜領の茶器を出すよろしくみゆれ共不相分候
傳來さたかならす候本間家上杉に被滅頃より持傳の小わきさし出す素あ
かゝねなゝ子のふち作風の武者目貫にさめもよろし至るふるし細川流
の拵に至る類す細縵理に三すみ成菖蒲作也大和物のことしいつれの作
と聞しに銘はしらす中心くさり居と承るといふ中心を爲抜見しに正眞と
いふ銘あり至るよろしき中心也つくしほうのこときものに全短刀也
無疑もの也こゝより市之澤實相寺にいたるこゝは日蓮の塚原よりこゝの
一ノ谷妙照寺のある所にうつり住みてかしこは谷間故こゝへ來りてあさ
日を拜されし所也といふ 此間五六町其時袈裟をかけたれたる松あり今は寶
藏にをさめある也正太夫を日を拜する時はとりたるけさをもかけ不申候
あは不相成夫を松にかけしはいかゝと聞しに住持困りたる體なりしか日
を拜する前にうかひてうすの時けさを松にかけられたる也といひき頓智
をきゝたる僧也此松に布めありと江戸に聞しこともありしか偽也直筆

けふ過る村 藤澤 牛込 平下 上野 長木 石野 原中 寺平 山田 窪田 炭屋 十西 十東 中本 龍五 村深 眞光 出是 々々 例也

之題目菅公之法華經なとうけかたきもの也夫を妙照寺に至るこゝは日蓮の住居也種々の什物あれ共取にたらす閻浮檀金の釋迦の像也とて住持こゝとくしくいひてみせたりづしより爲出みしにからかねにきんの箔置たるものもありくゝとわかる也住持殊に高慢に眞物をよし殊にほこり已前江戸開帳之節 御殿に女中共拜禮殊に感戴いたし正眞也とて信仰ありしよしいひき女中之佛像を目利珍敷こと成に金座に類せし品定せしを住持の證としいふも珍敷こと也こゝの什物みな夫に類す夫を眞光寺村眞光寺に至るこゝは 御宮あるに付かゝり湯之上のしめに着替拜禮いたすいか成わけに奉勸請候哉追尋ぬへし 東照大神君とあたらしく行書に記せし懸物を拜し奉ること也こゝには龍宮よりあかりたるといふ大鐘あり古物可疑ものにあらず古銅の色可愛也其外子昂之畫等ありいつれも取にたらず日蓮自畫の三十番神ありいつれも不審成もの也景勝納たるといふ甲冑あり甲は數物なるもしるへからす胴はかなり也くさりてはら

はらに成たり長刀二振ありいつれもよろしくみゆるさひてわからす候夫を河原田町に晝休いたす同所妙經寺之什物景勝朱印の外みるにたらす中原村本田村之什物之内に元信の筆といふ十六羅漢十六ふくあり古物さて又晝はしらすなから何分凡筆ならず見事いふへくもあらず密なるかこゝとくあらかことく剛なるかこゝとくやさしきかこゝとく珍物なるへしされ共眞物かはわれにしれぬ也八半時過澤根村にいたる明日は船に相川の歸候積に付先けふにて巡村はすみたり其内に可笑ことあり同心先に立下にくゝといふに下におらす其時ねまれくゝといふとはいくゝといふて下におるところもあり のたまおやすな とて叱ることあり是はかしらあくへからすなるへしをりくゝ頭をさけいくゝと目付役等之類いふ也廁に杉のおり枝をいれて罌丸をいらくゝとつゝかれし所もある也或は寺に岩清水を手水鉢に取りて夫か手水鉢は裸の木人形の股より竹のつゝを斜に出し夫を水走り出るなとけしからぬ仕かた也龍の口なと附可申をかく

せしは龍は陽物也といふよりおもひ附もしるへからす蓋は神明に通といふな
あやまりて生姜を神明
なるへし類寺の本堂の脇の廊下のたゞみをあげ天井より例の筵をつり下に
居ふる桶を置しに入しこともある也夫等は江戸にて旅せぬものはしらぬ
なれ共いつくも田舎はかくの如なるものもおかしきことなれ共歟五郎な
との田舎のことしらぬ故奉行に廻村してさへかくの如なる故民の難義
のこと江戸のもの難有おもふへきたため且は母上の御わらひの種ともおか
しきことをも其儘記せし也

○廿二日 晴 五時前に澤根村を立出て同所御番所を見廻り則御番所を
前にて船に乗り西浦七浦を海上よりみて是は澤根より相川の入口下戸村
を省てのこり七浦あれば也其七浦は二見村こゝにいせの二見のこと
岩あり夫々村名出る歟米郷稻鯨
橋村高瀬村大浦村鹿伏村也いづれも岩石峨々たる谷間の渦に村居を成せ
し也常に居間よりみる春日の燈明崎烏帽子岩等に大成いかにしてこゝを
冬は浪のこゆるやと驚計也けふののとか成日ならば浪こさしと誓する

ともくるしからざる程也勁松の寒歳にあらはるゝにてものは穩成時は君
子小人相混し君子もともすれば小人に近くなれとも大濤祁寒のことく變
事ならては君子小人の差別はわかりかたき也山中鹿之助か上もつれな
此上もつれな
身の心のちあるといひしも謂あることにて人は變によく處することこそ己
か力をみる所なりなとおもひ過し候うちにはや相川羽田町の濱へ参りぬ
舟中よりみるに相川のもの共老若の馳走る體いとかしまし鍵爲持たるか
行かふは役人の出迎するにて法師の走來るは御役所の詰醫師 御靈屋の
御別當か出迎として來る也遠目かねにゐるにわか家來共其外御役所の
塀の上より歸るをまちみる様なとありくみゆる也從者の船漕よするを
しはしまち居るうち岸の上に相川のまち町々の人々のよりしをみるに江
戸より來ける時にこと國程におもひも十四五日已來あやしけなる島人計
をみ居し目にては都のことくにおもふ也こゝのもの江戸か相川といふも
土地のものゝこゝろにはさもあるへし岸へのほれは其筋を役人共御やと

ひ其外之もの共までみちせきまで居ならひて平服す目付役ことくく
 に披露する也町々の子供は着替などして居る體也御役所惣御門の参り候
 當番之面々之内廣間役目付役出迎いたす出迎之廣間役は鑓箱に羽田町は出迎居し也夫々着服のま
 ゝにて召連し廣間役御船手等へ居間にて挨拶いたし組頭共呼出し相應挨拶
 およひし也われ今日までにて東西拾三里南北貳拾六里惣廻り五拾貳里
 三郡貳百六拾四ヶ村を廻しかさしてこゝろあたりたることなし鷺崎に
 百姓の飯をみて辛苦に驚き笠とりはしり等之難所風雨に歩行し貳尺三
 寸の新刀は々かさね相應なるに短刀をさし山坂十里に近く歩行しことの
 外くたひれ候右之體に而は都に而貳里三里之みちこそ三尺以上之大刀も
 役に立可申候得共陣中之心懸には貳尺壹寸前後之刀なるへきか鑓もち
 あれ共刀もちと申候こと陣中にはあるまじきか野太刀遣ひたらむとも鑓
 の用は如何可有之か平日竹刀之長短もしなひうちに長せすことを欲せず
 非常武篇の心懸あらはあまりに長きは如何あるへしか一日にてくたひれ

たり二日三日のことまして一月二月のおもふへき也しなひうちの論にて
 只に勝負のみを争は武といふへきかされ共勝負を争ふこともしらす理と
 話とに長したるは明儒のいふ野狐禪に近きものなるへしけふ通る七浦邊
 の十一二歳位のこととは海上一里に近きところへ大たらひに乗出て漁す
 る也はしめは子供の遊びを習ふとおもひしかそはよくみればたらひにの
 りて漁する也珍ら敷みし也 御役所へかえりみしに半開たる櫻はさら也
 いまた開かさりし花も梢みとり成夏こたちと成ておもかはりしたり池の
 葦など驚はかり延たり日月のしはしの間にうつり行ことあとみゆるもの
 を以みればかくのことしことを成さむとのこゝろあるものいか様にも月
 日ををしむへきこと也われ既に四十一歳に成れり先祖の積善と 上の御
 惠の深きによりてかくは被 仰付たれとひまの時くりかへしおもふに一
 つとこれと出來たることなし希古のとしの七十迄春秋をふるとも今迄の
 ことくならむには何事の御爲かならむや只利欲につかはれて老朽なむと

おもへは口惜きこと也何卒今日より尙いましむへしと只今もおもふ也
五郎など青年もの故こゝろして出精あるへし名身とゝもにくちて上の御
爲等出来ぬ時は山野の禽獸よりは遙におとれりわれいかもして此禽獸た
らむことをまぬかれむとおもふ也世に愚なるものをあの田舎もの百姓な
とゝいふ也され共こゝろなき時は其百姓には大におとりたる也春秋冬夏
朝夕に農事にかゝり 上へ御年貢を奉るは一分の出来たるといふもの
也此ほともうちかへす田の泥にて百姓は泥もてつくりたるかことくなり
居る也夫にはをひたる婆々もわかき女もうちたれかみのをさな子もある
也かく 公儀のことにかゝりきりにいたし居ると武家の當番等に主人の
み出るとは大に違ふ也せめては鍛五郎などもはやくわれ等かくるしむ所
の山野の禽獸の場をまぬかれてよにいやしめらるゝ百姓ほとの上は對
し一分をつくす武士たるへきこゝろかけあるへし士たるものゝ農夫に
不及こと日々に忘るへからさる様心かくへき也

○廿三日 晴 山本丈右衛門昨夕至り不快と才右衛門新十郎今朝申聞る定なきよの常とはおもひながら驚たること也

○廿四日 雨 きのふはものみよりみゆる所也一里岩の邊にゐしはく
鯨の潮をふきたりとそ家來はみし也追而某につけし頃ははやなかりし也
○廿五日 雨 ある地役人之親に汝か子はよく出精すといひしに左思召
ならば何とそ異見給るへしといひきいや汝か子は毀譽のあるものなれと
某へ對し候而は出精にて異見いふへきことなしといひてやみたれされ共
其心切なることみへし故に其子に追而あひし時汝か親はかくいふ也何も
いふへきことはなけれとも親の心切成故にいふ也汝か三年已前御吟味
時揚り入に被 仰付時のこゝろはいかに扱又出牢之上佐渡へ歸りて親子
手に手を取てよろこひ泣に泣たるとき心の心はいかに其囚人と成て佐渡の
地離るゝと出牢して故郷へかへるとの二事は實地を踏みてよくしるへし
只朝夕に其恐るへきと難有と之二事忘さらむ様にあらまほしき也外にい
ふへきことなしといひて置たりけふ其親に逢て其こといひしよしかたり

しに悴よりも一かたならぬ願有ことに親共にも申聞候よく相知候御さとしにて某か腸へもしれ候とて殊に歡たる様也人は實地をふみてみぬことは感動うすきもの也さしてのことにあられともことさ脱かに恐れたることには歡敷と一身に二年か間に二度うけしものなれば早わかりせしとみへき難有も忝もしらぬものゝ日々に起こりの氣の長するは末はわるきむくひ來也おそるへきことそかし

○廿六日 晴 至る暖氣也

○廿八日 晴 御出棺の出仕ありわた入壹ツを著す今日を初とす

○廿九日 風雨 此ほと相川の蕎麥や帆かけし入船と革の袋のゆめをみて夢はんしに聞しに海のみゆる所にて金山を掘たらむには必盛なるへしといひしとて彌十郎と申山銀山也裾をかたき石十間計はや穿ちたりまた何もいてすと此事にて三人計身上つふすものあるへしかゝる類こゝに多きこと也江戸のとみの札とおなしこと也 庭のふちのはな兩三日已來さか

り也ことによきふち也 七時頃御奉書貳ツ十四日廿三日附之御用狀來る市川之書狀并母上より被下候 御文并菓子二箱其外共相届一同之御別義あらせられぬとの御事何より之義也

○晦日 晴 けふほとゝきす承り候さむしわた入かさね也

○四月朔日 晴 月次の禮受ること例の如し此ほと風ひかぬものとはなし某も珍ら敷少々ひきたり尤半日も臥たることなし廿八日に月代すりたりけふは浴せむとおもひしかといまた殘あるかことくなればあすといひてやみたり云ところ鼻風といふものゝ流行せる也

○二日 是れ よほとの暖氣也わた入一ツにてよろしこのほとはちめといふ魚至る下直也味いさきと黒鯛に似たり目の下八寸位なる品五十文位也あまり下直故味なきかことしと家來なといふ故江戸にて干魚給候時感心せよといひて笑ひし也 江戸へ佐渡より出て店持たるものゝ世話に成

所の主人酒のことにはあやしきまで巧者也けりある時佐渡第一の酒を一ひさこをくりしに直に盃へいれこゝろみて至る珍敷酒也とて歎し故いつくの酒なりしや奉る某もよき珍かなる酒とみ聞ての脱しらぬ也そこのかくのたもふ上は彌以證とする也いつくの酒にいかなる所珍敷やといひしにわれいまたのみたることなしよつて珍敷といひし也尙考へしとて追々にのみ考てのちいひしはこの酒あらしき水もてつくりたりこれを譬ゆるに山川の早瀬などいふものなるへしさるにしてあく強し是水のこなれよからぬ故也されは山淺き國の酒なるかとおもふ也といひし故かのもの甚驚て實は佐渡の酒也といひしになるほと離島小國の酒なるへし全地狭く流短きによるものなるへしといひしよし廣間役吉田藤助が家來俊藏へ語りし也

○四日 晴 わた入貳ツにてよろし けしからの大鯛壹枚民藏持参り家來一同へ振舞のこと申しぬ價は五百五十文也とあなたかかしけしからすと

いひし是に而佐渡の魚類下直のことおもふへし 此程は池そひの藤ことよろし六七間餘もあるへし 至る見こと也かきつはたつほみ少々宛みゆるうのはなさかり也御役所の庭は花のまつはあらむことくにうへしもなるへし 江戸の御臺所も魚類に而鯛の献上ありしよし同役より申來ぬよつて頃日魚類を給候廿一日也 久しく給されは殊に味あるかことしいにしへの三年の喪などいふことのある也魚類味あるとおもふは恐入たる事也

○五日 晴 けふ役替申付るもの廣間役以下數人ありなかにあしきもありてあはれにおもふ也其内に兄弟四人結構につとめしもの、内二人迄けふあしき役替せりみつればかくるなどいひて土地のもの一向にあはれむけしきなし某等かこときもの、おもふへきこと也某もつゝしむへし新右衛門幸三郎共心つけ候へ

○五日 晴 よほと夏のけしきもよほし候

○六日 晴 時太郎順之助願之上にあつりに参るふく はしめ あひなめ等十計を得たり順之助たこの枕といふものを得來れり桔梗のとき姿にてうらもゝいろにて表にくろ地に赤き紋あり厚くして蛸のかたさのこくとくにてぬらめかすざらゝとしたりるものに見し姿菓子に似たり海の虫の類なるへし海よりあけしときはよく動といふ江戸にてはしらぬものもなまなくさし磯くさし目もはなもなし

○七日 晴 わた入にゐはあつし七十五度に至る

○八日 晴 七十六度にて暑に至る家來單衣のものあり

○九日 晴 家來老人もす裕也 佐渡にてはチウシ積のある母うしは他國へはうらぬ也是は二疋子のある牛を他國へ賣赤泊といふ所より出船せしに其牛海中二里計の所を泳て歸り其牛こやに入て死けるよりもとより國禁の上にて別る其禁を密におかすものなしといふ 此ほとは庭の藤ちりてかきつはたはらのはなさかり池は蓮の葉至る少也地にあはぬ故なるへしこう

ほねは咲そめたり

○十日 晴 清暑の如し八十一度に至る 佐州に髪ゆひといふもの出來たるは四十年來也某のもの江戸へ行き返りて髪ゆひに成十六文宛にて結たり若きもの殊なる晴には結せしよし彼ものひんたらひ造り度とて出入もの々百文宛もらひてつくりたり佐渡のものは髪たらひとて持歩行候故必手桶のときものなりとおもひ居しに丈高き筥也とてみな不審せしよし也田中從太郎いふ佐渡にいにしへより唐本にゐもよみたるものなし某か本よみ詩文章なとするは佛法の初る日本へ渡りたるかことしと誇たることにあらざる也七十一歳に成地役人いふそれか幼年の頃四書の名は知れるもの多し早五經のことは御經か五經かしらぬ位也され共近頃かく成て難有といふ也われよつておもふに五六十年の昔より却る人氣開過て佐渡の人甚わるく成たりよつて徒に書籍をみて聖賢のみちに實踐のこゝろなからむには私智日に長してあしかるへし書物よむものゝおそるへきこ

と也唐土に亦も三代聖王堯舜などの時はみなひらけぬよ也こゝろあるへき事か 佐州の一國內之寺社之什物をみしにいま相川のものをみすよつて寺社へ其をいひ示して什物書出させみしに相川は金銀山のなきうちにはつか成漁父のみ居し所の俄にひらけて寺夥出來たること故重器とすへきものなしされ共龍宮より春日大明神へ奉りしといふ能の面或は天滿宮の自ら彫刻ましませしといふ天滿宮の尊像日蓮か飯くひたる椀雷か置て行といふてうしさかつき當麻中てう姫の曼多羅なといふもの夫々書出したたり重器と什物と誤傳へし哉此外夜着蒲團有之又は勝手道具疊建具少々有之などの奥書せしもみゆおかしき事也 夕かた鯨の潮をふくよし家來の申せしかは物見へ行てみしに今横岩のあたりといひし故此横岩はもの近き岩也その邊をみしにはや沖のかた二三里内外ともいふへき所へ行たりとみへて二ヶ所にて一道の白氣天に沖するかことく吹あくることしはしは也是は夕日にかゝやく故也をちよりみてかくの如しそはにては定あ

よほとのことなるへし二尾とみへて二ヶ所にてふきし也

○十一日 晴 頃日十二日計雨なし定あ歸府之頃日々之雨と此ほとは晴之事を一同日々うらみかこち申候人心の勝手今にはしめぬ事に候

○十二日 雨 四月三日附之御用狀到來いたす 母上より之御用狀并新右衛門之書狀鐵作より之書狀相届今日は便も有之候間新右衛門鐵作之返事出之 母上より之御文は昨日申上候外は別に可申上義無之候間御返事奉らす候

○十三日 雨 民藏義塚原三昧堂根本寺阿佛坊妙宣寺に參る六里計りあるといふ此寺々は開帳百文宛也といふ阿佛坊迄は五十町道七里餘也民藏大に草臥候由也奉行之家來故寺にても丁寧にいたし候由乍去開帳いたし候布施二百文差出候由也され共漸日蓮の像を爲拜候計に何も見すと云ふ巡村之時は改之心得に付像之古色或は書之真偽等を評せしかさそかし坊主不承知なるへし絶倒

○十四日 微雨 昨日石井昇助事石枕院天外輝昇居士か墓相川曹洞宗高安寺の条藏参る追々家來参詣之花手向あるといふ墓は佐渡奉行川路三左衛門家來石井昇助墓とあり碑は三重臺に惣高四尺餘四尺五寸四分あるよし也もあるへし某か供のさふらひには過たるもの也と条藏のかたりし也 御船見分いたし家來歸りて申せしは船に祭るところの神の神體は紙ひいなにて夫は紅白粉をはしめとして粧具十二色并骰子を貳ツ納めて其上に埋木をすと納所は帆柱也船たまの忌ものあり くちなは たのき かみ也といふ蛇可好にもあらずかみみの忌といふこと紅粉に不都合也狸を忌は餘國ならば狐なるへしある人の語りしは此ひなはひいなにあらすひなふりのひなにてかたちもみめも又ひな也よつてかみみを忌也狸をいみしは度々人に化されけることあるもしるへからすといつれもおほつかなき事也

○十五日 晴 庭に出てはや歸るさも近く也けりなとおもひて歸るとてつきぬゆかりをかきつはた隔こゝろの色はあらしな

みなれつる池の蛙もや、近く歸るわかれをねにやなくらむ
 かりねにも一とせ近くなりぬればなれてわかれのおしまるゝ哉
 又もこむ春待てさけ山さくらことしはしけるみとりなりとも
 はちす葉のわか葉ももれぬわかれちの涙おきそふ露のしら玉
 のこしぬることおもほへてかへるともにこりにそむな池のはちす葉
 うれしくそかはらぬみとり故さとのこゝろを庭のまつにみる哉
 なつくさにまたわか葉成庭の菊又かさねみむあきやちきらむ
 月花に山ほととぎす此庭にきゝしも近きわかれとはなれ
 いへつとにならば成さなむ此庭に咏ことたる山と水とを

○十六日 雨雷 相川之寺社より靈寶物を出す珍敷ものも多尤兼而其事
 いひてさらてもなきものは取捨せよといひし故なるへし西光寺に二尺計
 の平うちの刀あり切物至而見事なるへしとおもはる本問家所持之正宗といふ
 眞偽はしらすひらうち
 無銘燒ケ鏑甚しくみへす宗近刀是も無銘也二尺四五寸餘もあるへし至て切先細
 たるもの也

しなれ所々かけて 此刀は春日社人津田山城より出せし也是も本間より之獻
備と申せし也興禪寺の大涅槃畫像是は明晁か所畫といふよくみゆる傳ふ
る所は京五山之内興福寺の所化年をへて住職し明晁に畫かせて贈り
し也と惜哉彩色を追ふ手入せしもの也され共なみくならずみゆる也其
外配流になりし公家之墨跡等多くあり小倉宰相公連卿といふ人の試筆に

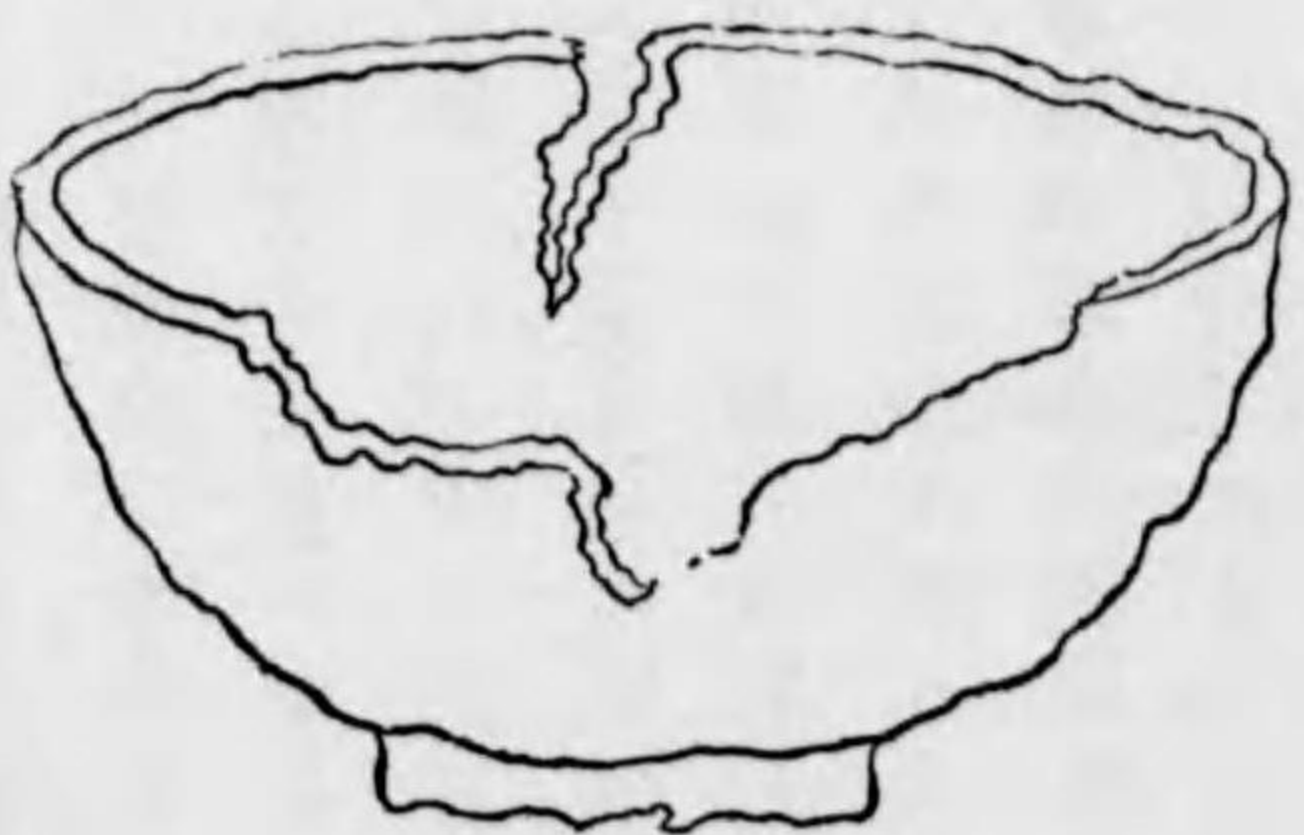
わたつ海の最中に霞む朝日かけ波路のとかに春やくるらむ
浪ある、雪の高濱一夜とてあくればはやかて霞む海つらむ

元日やあれてもさすかとこやらか

此外此卿の七言絶句の詩等あり

雷の銚子といふものは水色の地に薄紫の村雲たちたるかこときもの也
日本のものともみへす磁石なから至るめつらしくみゆる也本敬寺に日
蓮の椀といふものありかたち圖の如し其龜末なることいふへくもあら
す小刀などにてくりたるかことく柱ならむにはてふなもてはつりたる
計といふかことくにて今は乞食非人たりともかゝるものは持たぬ也今

高サ壹寸五分



日蓮上人之椀

佐渡國相川下寺町
本敬寺寶物

のよのものとは更にかはりたるもの也其椀の傳來書に添狀之事 一澁
手村地頭安達兵後守殿兵庫頭をかく記家老續木孫右衛門祖師依御宿成所
持之靈寶數多有之候得共越後影勝景勝の誤字也入亂之時分致紛失殘る靈寶と

して祖師御常器枕有之候依是當國他國も傳聞致拜見勿論小木_也安隆寺井河原田_{名邑}妙經寺阿佛坊切々所望被致候得共手前に不思議成事數多有之或時は眼病平愈之者多立願之品々相叶申候故于今持傳候所に此



厚サ壹分五厘

度當村浦御目付役松田助左衛門様依御肝煎貴寺に相納申候後代可爲什物候仍添狀如件

享保二年酉四月五日 奇進主澁手村續木孫右衛門印同倅同名兵之丞印肝煎澁手浦目付役松田助左衛門印 相川本敬寺様

とあり添書之趣偽物にあらされは椀の日蓮か枕か否はしらねともいひ傳へしも古きことに其古きこといふへくもあらぬ也此椀の龜末なるをみて塚原の牛馬を捨たる所にある一間四面の三昧堂に居なからも心を動かす法華をときたることおもふへきこと也今のは法華を信するとはいひなから欲深くしてとかくよき衣類うまき物をこのみはつかのことはら立或は孫や子のためならぬ_れよくをなしみるものきくものにこゝろうこきて地獄に生なからをちてこゝろをくるしめ又は少も辛抱のならぬよりうそまでをいひて人をわるくいふなとみな五欲の惡よりいつる也法華經に偽なからぬには日蓮か必手傳て地獄へかゝるもの共を投玉ふなる

へしつゝしむへきこと也木像は木のきれ經文はくろくすみのかたをおしたる紙也夫をよみおかみて成佛せむとおもふはをろか成事也それよりも半時にあもよろしく悪心なく欲を薄くすへき事也

○十七日 雨 五時頃より山之神なる教壽院の御宮に拜禮として罷越きのふ七時よりこゝろよりの御清を成して詣ける也至る六ヶ敷出来損したりされ共けふの拜禮ある故にや久しく妄念に流れはせず難有こと也畢る孔廟へ參る拜禮畢る學問所引受田中從太郎其外定役並役のものとしはし申談事し例之通稽古所に參るこゝは地役人の子供等か手習并讀書する所也二三十人計居たりよく精を出せおとなしくして孝行せよと辭懸遣し候いつれも平服して居し也夫々武藝の稽古所は常は參るなれとけふは早くいまたはしまらぬ故參らぬ也某聖像を拜すれば必地役人の子供に逢て辭遣す也是は往々は佐渡の要たる御用立人もあれかとおもへは也奉行故に子供を拜しはせねと拜するもおなしこゝろにて必辭を遣す也是は則御

奉公と一つなるへし

○十八日 晴 さむしわた入かさねにあもよろし一ツにてはさむ過候俊藏銀山のみちにて磯なのこときものを摘居るをみて尋しに萬歳といふものゝ由わからぬ故萬歳とはと聞直せしにそれならば江戸にては歌うたひとは申さすやといひし是もわからす醫師に問しに江戸のラムハコといふものゝ類也と所によりけしからす名も違ふ也

○十九日 晴夕雨 重輔少々不快風邪也田中從太郎戯に云此國にあ病ある時は祈禱よし醫師の薬はよからす扁鵲か巫を信して醫を信せざるの説とは大に反せり薬はきゝめなくして若哉の害はかりかたし祈禱は利益も害もなしされは祈禱のかた薬よりは大によしと醫のことは是にあおもふへし 誰かいひけむ 江戸狐佐渡の狸に化されて一度は來たり二度はこむこむとされは誰もこまるとみへたり

○廿日 晴夕雨 けしからぬ大鯛一枚貳朱也家來一同へ遣し候至る見事

なるもの也

○廿一日 晴 此ほとはかへりのしたくにて家來共いそかし某もいろいろの御用多し

○廿二日 晴 江戸のことはしらねと定る天氣かもしらすあすは久須美出立いかゝあらむなといひき 巡村の時在郷に話に某か村の鎮守の祭は相川の祭ほとにはあらねとも至るよろしと殊更にはこりたり其相川の祭といふものは兼而もいふふるひたる人形に今畑より採來りけむともいふへき程の東捕塞を臺せしもありて笑ひを忍ひてみし也先つは江戸の香具店のかさりに似てかみひなふりなるもの也然るを在にてかくはいふ也又相川の役人の都しらぬものゝ海内にならひなき祭禮のことくおもふは生國のこと故蛙見當よりのこと也其内江戸へ出たるものゝ都の御方には笑ひ玉ふ程のことにて江戸の水川祭のことなるへし哉とて謙遜していふ也水川は大社のこと牛込の赤城市谷八幡のかけまつりなといふものにて

も遙に相川の類にあらずそれかくはいふ也しらぬにもほとのあることそかしされは虞卿か天下の師を尋たるといふこと□のことならずや都に居ながら懇意につれ東脩等少のこと或はくさくさの小事にかゝはりてさらてもなき師の門弟子となるは江戸に居ながら相川より又も末なる海濱の祭禮をみて喜ふの類なるへしよき師につけは一生涯たちてもしらぬことしはしの茶話にきくこともある也何事も學ひなむものゝこゝろあるへきこと也

○廿四日 くもり微雨 こゝの春日崎に車前子草のうらに白毛ある奇品あり江戸にても珍とするなとことく敷いひてけふ取よせてみしにラムハコといふものゝ葉のうらに聊むく毛のこときものゝありし也一同笑たり乳母か子の齒に白き毛あるならば奇也ともいふへきにとて絶倒せし也田舎のもの土地にはこることみな此類としるへし

○廿六日 曇微雨 けふより本住居久須美待受を普請に付向陣屋に引移

廊下つゝきにて都而手狭也引移といへは旅宿にても新宅のわたましの如くにはあらず

五月雨にぬれしかあやし袖の露かりのやとりもわかれ也とて
きのふよりおきこそまされわかれちをおしむや池のはちすはの露
こゝのくせにて人足共かゝる時もの盗也灰又はこも或は古草履之類也け
しからぬ事也

○廿七日 曇微雨 いかにせしや十三日出之御用状いまた來らすいろい
ろの取さたなといふ也これも例のくせなるへし

○廿八日 曇微雨 例にて出立前に御別當教壽院を蕎麥を家來までへく
るゝ也 こゝり鯛といふものを賣に來る大さ五寸計至るひらめなる魚に
あくちもいらも至る小にして尾ひれともみとり也全身の色薄墨にして村
雲の立たるかこときあやあり脊に頭のかたにより太き針のことき一本の
ひれあり其下に汐をふく穴ありよき味の魚也と土俗一名をハクチウチと

いふいかなれば博奕の名あるにや江戸にてはみしこともなき魚也

重建佐州脩教館記

治教隆於上而風俗化於下蓋教化之本在學校之設其所關係者可謂至大矣
方今 昇平文明之化洋洋乎洽於海内自邦國以至鄉黨皆莫不有學猗歟盛
哉我州之有學初於文政季年命曰脩教館無幾州治有災延及館中堂廡門廊
盡燼書庫僅免時從事者有所請稍建齋舍炊廚及南西二門而明倫之堂力未
能及焉榛莽雜穢使人慘然天保庚子 川路君蒞治首察風俗委靡教誨胥吏
大要以有犯無隱之意且諭且戒諄諄不倦衆皆心服以達教命爲恥一日巡視
到學館之舊趾深憫教學墜廢慨然有重建之志吏人大喜敢申前請越明年穀
豐民和遂及此舉其規模仍舊貫更省有華飾三閱月竣功僚屬歡抃相率賀成
清在廳下竊語僚友曰我州斗絕海表土瘠人頑流風汗俗殆有不忍言者幸今
遭逢至治之德化彝倫之教淳樸之風所由興端在乎斯此館若亡則吏民亦可
亡此館若存則吏民亦可存闔州生靈之存亡實係此館之興廢豈可忽乎豈可

忘乎恭惟入此館登此堂聞道承教永保其命者不啻度奉明府之休命又庶幾報國恩之萬一乎於戲可不懋哉皆曰爾爾既而命請記其事謹記顛末以軋進止云

脩教館督學臣田中清謹識

○廿九日 晴 同役今廿九日寺泊出津之先觸到來いたす 此ほと年來のことし至るいそかし、追々捕ものも有之白洲多く其上くみ頭四ツ前より七ツ半時過までも此長日に居り申候けしからさる事也給人を急に調物有之候而立合として大吹所の差出す朝より夜四時迄も歸り來らす候尤某も夫につれ用多也けふは少もなくさみなし少々書物よみ候位之事に而よなへに一覽もの多し

○五月朔日 晴夕曇 月並之禮受ること例の如し組頭暮六時頃迄居るといへ共御用不殘不相濟候至る御用多大晦日の如し 道中日履之もの今日

參る八重島等之書狀を出す 昨夜九ツ時十三日十九日廿一日附之御用狀到來いたす林肥前守之御役御免差控御加増被召上候義小野美濃守同斷美濃部筑前守御免甲府勝手小普請入被 仰付高三百石被召放候由之申參る驚歎いたす 御新政之程奉感戴され共恐入たる事也右等之人は某か懇意なるにはなけれ共只々驚入たる事に而氣之毒にもおもふ也

○二日 曇風 此程吟味之一件に可笑ことあり佐州之寺院はいかくりといふものにもあるかことくとかくに厄介の女を寺におく也然るに某か佐渡奉行被 仰付候と相川邊の寺院はことく寺より出し市中に店もたせたりと某か佐州に參りたる時地役人共右一件之あと故ことに恐居最初は吸口を銀にてはりたるきせるもち居候ものも家來をみると懷中へいれ候位故かく申成し候ことかと計おもひ居し也然るに佐州相川の在へ醫師參りねたり事似せ役人之風聞ありしによつて召捕吟味せしに片瀬の水上方といふ寺院かの醫師に申せしは今度の奉行は嚴敷惡黨もの召捕に成よし

也もしや寺院へ手のいるへくもはかりかたし夫等之ことあらむにはしらせくれよといひしよりをもひ附て似せ役人になりし也地役人より家來は取扱にくく家來より某か身ひとつの修めかたにこまり居て中々寺院の不律に及ふことあたはず然るをかく寺院のおそるゝは脇坂中務殿の手につきて色々のことせし故に彼朝臣の餘威を某か荷ひしなるへしと密に笑ひ居る也

○三日 雨夕晴 六郎左衛門朔日に寺泊へ着して風次第渡海のよし申來る一同歸りの彌近きをよろこひぬ

○四日 晴 八半時頃に久須美六郎左衛門出帆之帆かけ沖かた三里ほとに相見候由赤泊より注進有之其後午中刻同人赤泊に到着之旨廣間役其外を尙注進有之候

○五日 曇 端午之禮受ること常の如し 八時過久須美六郎左衛門到着也さし具足を胴丸と記し候上覆金から革也其外供立みな某よりみこと

也六郎左衛門七十一歳老健以前にかはらす六郎左衛門は本陣屋に付参り御機嫌伺いたす其外御用談に夜五ツ過まで相懸り候 六郎左衛門は某か支配勘定たりし時格別之推舉に寺社奉行調役之當分助にせし也此時六郎左衛門布衣に調右之次第に付其上坐たらむこと公事なれ共心安からすよ役御勘定組頭格也 つて勤へしに月番のもの御役被 仰付候順序に不拘上座たるへきこと町奉行御勘定奉行之評定所之出席并近く當地之組頭までも如此也よつて目付役に例を尋しにさにあらずと右は深くの穿鑿せしにもあらしと尙尋さする所に在勤として罷越候奉行之上座たる例もある也よつて六郎左衛門は上座某は次座也まして居間に燕居も同前之義に付始終六郎左衛門を上座にせし也家來共はよく傳達等都手ひきくいたし不遜あるへからす無洩傳達すへし是則御奉公也さて六郎左衛門は某に恩ある人に付心は某か方筆下之心得たるへし下々まで危略あるへからすと書付を以申渡之

○六日 曇 六郎左衛門方の演説其外申渡等之義に付午後參る暮時前
歸宅せし也

○七日 曇 六郎左衛門方の申渡等之義に付參る役替申付候ものは拾四
人あり 彌明日之出立と觸ければ地役人共之内廣間役共暇乞として參る
けふは一人宛申候事也こゝろ心のこと共にて秋草の花咲たる體也こと葉
の程に凡平日之人才もおもひあたる也又今までの勤かたによりて某よ
りもいろく、挨拶およふ也常の某かおもふ程に向よりもいふかことし人
をとかむへきことかはとおもひあたる也

○八日 曇 拂曉之出立に亦出懸六郎左衛門玄關迄相望かへる當番之も
の并六郎左衛門用人御門内に亦暇乞いたす夫ををり戸口其外遠きは澤根
の湊迄をくり來る七時頃に小木之湊に到着いたし山方役に藏田太中とい
ふものあり佐州に亦之歌よみ也已前淳介へ 隅田川すむらむ月におもひ
出よわかたもとにもやとるものとは いふ送別の歌よみし男也我人より

物受ることとはなしされと歌贈るほとのこととはあしからしといひしに
五月のはしめ大江戸へかへらせ給ふをおくり奉るとて といふ辭書に亦
たち花のかくはしき名をなこりにてほとは雲井に行ほとゝきす とよ
みておくりし也太中か實名は茂樹と申せし

けふ御役所立出るとて

一とせをうしと過せし島根しもなれてはぬるゝわかれ路の袖
わかれちのおしあけかたの露そおくいさむ歸りの都なからも
をり戸口といふ御番所亦に島の役人共わかれを告げれば
おりくはおりとの關の隔なくことの葉よせよ佐との島人
濁ぬるこゝろしなくは諸人よ此相川に千よも住らむ

中山のたふけに亦

こともなく佐渡の中山又こゆるけふの歸りもいのち也けり
歸路におもへはやすし中々に佐渡の中山たへかねてしも

石井昇助のみげふの歸りにもれけるよとおもひ出ければ

おもひきや石井の水の手にもれて結びもあへすわかるへしとは
なき玉のこゝろをくめは袖ぬるゝのこす石井のわかれかなしも

○九日 曇風まち也 昨夜旅宿の假廐の繫柱たをれて馬の肩を打たる故
無事成馬なれ共大に驚たりされ共さしたる事はなし旅宿假廐の柱などは
こゝろつくへき事也

○九日 雨 小木湊に風待也 佐州御役所之犬如咄きのふ某をしたひて
五十町みち十里餘を経て此湊へ來れりみちにて辨當の餘を與れば不食し
てみつから穴をうかち夫へおさめて土をかけ石をのせ置よし也來るには
某か家來共の不便也とて世話するもあれと歸りはよほと飢且難義して相
川へ參るころは甚敷やつるゝことの上し不思議なるもの也右食物を藏む
るはかへりの手當とおもはるゝ也

○十日 曇 けふも風待也・五月四日附之御用狀到來新右衛門鍬五郎

之壹封相届く

○十一日 曇 けふも風待也 入費もあり歸情もあり雨のうきこといふ
へくもあらず中々拙吟等に可盡ことかはよつてこゝろなくさめに經書な
とよみ居候易の濡のことなどおもひ出候而漸とこゝろいられもおさまり
候乍去酒食にまつ場には決而ならぬ也民藏歎して御運よき御かたなれと
道中の川とめ大雨等いくたひもあり夫をかけみちとあきらめて此風待の
つれゝも格別には不存といひき此位のことには濟ならば難有こと也民
藏よほとこゝろくるしくおもひしとみへし難義計にあらず入費か成の所
の持參金ほとなるへし厄拂にはちとゝ過分也といひて笑ひき

○十二日 雨 さみたれさへうきものなるに一年之御用濟歸り懸之旅中
風待にてけふは信州路あすは關東に踏込むへきにとおもひて其うきこと
いひつくすへきにあらず

○十三日 けふも又雨也

くれなひにたもとやくちむ五月雨にぬれにそぬれしたひの衣手
しはしみし日かけは又も雲とちて軒端さひしくさみたれそふる
さみたれに歸る船路をさへられてたとへもあらぬうきおもひ哉
うちよりて晴より外はいふこともなきくくらすさみたれの空
わすれめとおもへは又も五月雨におとつれまさる軒の玉水
さみたれはこゝろつよしなけふいく日わひしと人のかこちくらすに
晴るゝ日につなてときしは夢船にてなを袖ぬるゝよ半のさみたれ
ふるさとの梅か香ならて東風のそてぬらせとやおくるさみたれ
晴るゝ日ははれしとおもひ捨つゝもいくたひなかむさみたれの空
五月雨の船とゝめすはふるさとはや程近きたひねなすらし
朝夕にとふ島人もさみたれのうさいふ人に言の葉もなし
五月雨にかゝるみなとの船いくつわれのみならぬうきに有けり
ほとゝきすうら山敷もこへ立てわけ行沖のさみたれの雲

さみたれもしはしにこしの海なるをわたらむほととの晴間あらせよ
よりてかくうらむこゝろをさみたれのしりないかに晴は脱さらめやは
軒端なる玉水よりも五月雨にせきあへぬわか涙也けり

○十四日 雨 けふも船まち也つれくゝのこといふへくもあらず下部の
日傭に軍書よみ咄家などあり其外將基等おもひくゝ也博奕を取締嚴敷い
たす 相川より附参りたる犬の不便さにけふ歸るものに相川へつれさせ
むとせしに行かすきくに常に奉行の出立の時湊に参り乗船見届けて歸る
ことの上し也歸りには五十丁みち十餘里を歩行てつかれ候上食もなく四
五日はあはれなる體になり居るよし也此犬のことくに人の歸伏せむこと
あらむにはうれしかるへし

○十五日 曇 あまりのつれくゝに家來を湊に出しみしに四國九州其外
所々の船々五六十艘も湊懸いたし居候由風は東北に能登のかたに参る

か下の關のかたならては出しかね候由けふの天氣ならむには必定兩三日東風なるへしとてみな船よそほひしみる／＼三里四里宛走出たるなどいひし時のこゝろいかゝあるへし某か幼時に手習師のかたに行て怠ことありてかへることゆるされす人々みな歸るときに獨とゞめられてなく／＼好まざる手習せし時の甚敷ものこそありけり然るに七ツの下りの頃よりいさゝか晴たれと例の日よりくせなるへしとおもひ居しか長き竹の末は紙きり下て置たりしか西より東はなひくか如しこはとおもひ居しうちに又東より西はなひく也されは風間／＼に動かとおもひ居しうちに日くれて御船手辻新兵衛來り家來もていひしは十三平といふ所へ行て入目をみしにけふは入日みへぬあすは十に八ツ迄は出船なるへしといひし時は夢かまことかといふ計にゆけふまでの愁眉頓に開たり日くれより彌順風に西空晴わたり月さへさしのほりたるはこゝろうれしくおもひし也

○十六日 晴 風なし海上如鏡今曉七ツ半と申には案内せむと御船手よ

り申出しか鶏の初こへきく頃より目覺たり家來共いつれもおなし燈にあり髪月代いたし候而五時前に乗船也例の如くみるものありの如し船中格別のことはなけれと波濤少々荒かりければ某并家來之内壹兩人之外はいつも吐氣にて大になやみける人心地のものなし八半前に出雲崎本陣に着也こゝはよき所にて都々の人物等迄島國とは格別也

きのふ佐渡にて日くらしなきければ

常とははなく日くらしのねもむへし佐渡の島根はものかなしきに

うきときはいつも秋とてさみたれの空も日くらし鳴くらすらむ

けふ船中にあ

こそよりのうき島根をも忘れけりはれわたりぬるこしの白波

行船に遠かりぬる佐渡の島うきねもなれてわかれかなしも

○出雲崎の本陣はつるかや松之助といふ豪家とみゆ庭に高き山あり芝原に亭あり松あり月のなかめさそとおもふ也

○十七日 晴 六半時出雲崎出立石地椎谷宮川荒濱を経て柏崎宿にゐひ
る飯給夫を鯨波青海川龜割坂をこへ鉢崎宿の御關所相通り同所は止宿也
○出雲崎はよき所なれ共柏崎は又一段よろし五六萬石の城下のことし柏
崎より鉢崎の御關所迄は米山の麓をめぐり候故殊の外なる難所也東海道
ならむには峠といふへき所いくらもある也 龜割坂ふう湯の水といふ
石碑ある泉あり義經奥州下りの時妾の出産して龜王といふ男子をもうけ
られたる所也とて土俗はことく敷いふなれと例の附會もしるへからず
肩輿のうちよりみれば茶店の婦人此茶店を辨慶茶屋と云産湯水の由來を旅人に解示し
尙其ことを巻物に記たるを手にもち高らかによみあくる也其體辨慶か勸
進帳と口よせの女巫をかねたるかことし大笑也鯨波といふ建場の茶やは
北海に向たる山のはなにあり北海よくみゆる眼下の海中に人多くよりて
あまり深からぬ海底へ没して何かとる様也清水故あしの中中にひらく
とするなとみゆる也あまにて女なるへしといふされ共みな月代のあるか

ことしきたかならすよつて例の遠めかねにてみしに婦人の手拭をかふり
て水中へ没海草をとるにはありけり細毛ことく敷へきほとにみへし
家來共一同絶倒此邊に糸の仙人あらは海中に溺へし石地の建場は内藤某
といふ舊家のよし千石以上御旗本長屋ほとん長屋あり角柱銅包也出しけ
たも銅包也關東の建場といふものはあやしき茶店なるに珍敷こと也

荒濱といふ所にて

吹よせしまさこに深くうつもれぬ風荒濱につく芝山

海上を咏て

なきの日もこしの海原あらければ白波くゝるあまのつりふね
けふよりそ荒磯つたへいくさともなみのよるく旅ねなすらむ

みねはまた雪ありければ

あらいそのなみと高根になつても尙いろをあらそふこしの白雪

佐渡よりも風俗變りければ

賤の女も髪とりあけて島根よりひなふりうすきこしの浦人

○十八日 晴 六半時前出立西濱といふ所にて

けさはまた一しは遠く横雲のたえ間にみゆる佐渡の島山

高根なる残る雪よりあけ初て波間はくらきこしの海原

此西濱といふ所は東南は山西北は海にて海邊けしからぬ真砂地深き所也
人足ことくく板金剛をはきたり且十人に六七人迄は婦人也こま下駄
はきたる婦人の長持を擔ひ行なと珍ら敷こと也此西濱鉢崎より二里之間
也竹ヶ鼻といふ小村
之濱に野立也柿崎宿上下ヶ濱を経湯町宿に晝休行ヶ濱村黒井宿春
日新田稻田町を過高田に至りて止宿こゝは榊原式部大輔之城下にるよき
町也一本陣に雪を差出す半は氷けれともさくくとして暑にたへぬ時
故ことにめつらし

○十九日 微雨 六半時高田宿出立いたし茶屋町荒井宿二本木關山宿二
俣宿小田切大田切を経關川宿に小休關川關所之改濟に榊原式部大輔領
知此御關所之川

向信州に成例之通通行野尻宿に至り止宿 關山宿に晝休いたす 野尻宿に
はよき湖水あり 小田切と關川之間に自分并六郎左衛門に被遣候御奉
書持參之旨宿役人申立る關川宿迄召れ同所に受取掃部頭殿 御役御免
并鳴物之義御百ヶ日も相立候間 御免被成候旨之被仰出也

○廿日 曉雨午後晴 六半時前出立柏原古間俣禮に至る矢代渡船川留
に付神代長沼福島川田を経松代に至る都合壹里半餘也 松代に本陣な
し領主祭禮内覽之場所市中に有之同所止宿也長沼村と福島村と之間に
而筑摩川を渡る至おたやか也 松代之領主は懇意に付別段使者來る國
産之綿相贈る

○廿一日 朝くもり午後晴 六半時松代出立いたし二里に矢代に參る
夫利倉坂木鹽尻上田海野田中はく屋村を過小室に至る 上田は松平伊
賀守城下に上田織商ふみせ共多よき所也 矢代とくらの邊より姥捨山
みゆる 小室に參る途中へ元牧野遠江守家來の悴に一旦某か家來たり

し長谷川慎藏事山中出迎として出居尙小室を泊りて参り國鍛冶の脇差を贈りぬ金子菓子など遣したり夜ふくる迄物語たり共つきす民藏とも物語たきよしに九過暇こひて退きぬ 夕方々雷鳴電甚し

○廿二日 曇 六半時小諸宿間瀬口村追分宿沓懸宿輕井澤宿笛吹峠をこへ坂本の關所を過松井田宿にいたり止宿 中小諸より二り計をくり來りて當直なりとて別れをつけ歸りたり某か禁酒して久敷破さることをいたくよろこひきなをつゝしみ玉へなと告て歸りぬ不相替之深切なりき 某か評定所留役たりし時中山道東海道旅行せし時之ものは道中宿役人共之内に甚少く輕井澤宿本陣問屋は其頃のものに某か去る戌年き曾山に参る時吟味役成たるをよろこひしかけふの旅行を殊に喜ひ嚴敷取締いたし候義なと難有由申之其時の本陣は隠居せしか夫も出て家來に喜ひを申せし由也

○廿三日 晴 六半時出立に八本木安中板鼻豊岡高崎倉ヶ野新町石神

を経て本庄宿に至り止宿俄々暑氣にて病人多し今日江戸に田口加賀守に被仰渡有之候由等初承り驚入

○廿四日 晴 六半時出立に牧西深谷籠原熊谷久下吹上ヶ三田箕田を經鴻巣に至り止宿 此ほと俄々大暑に病人日々多しよつて某も恐れて食味こと更に心附候兩三日已前迄は例の焼飯計也しか日中を携歩候間おのつからあしきかのあるか如く也よつてけふより建場にありく飯壹貳宛兩度くらひ給候 日雇の入口鴻の巢まで先達参り候處著無之由に熊谷へ出迎十日已前此日雇入口は三田村の建場は軒場等くち果たる村持體の社地也され共大木多し休うちに月参りもの之由に参詣もの有之候故家來見來りて三田の八幡也といふよつてみるに石の手洗盥に三ツ星の紋ありさらはとおもひて口手あらひて参詣せし也拜殿かくら殿はことに破れたり本殿は存外の銅瓦にありき郷名を箕田といひ宮居ある所を宮前村といふ三ツ星の紋ある所もおもへは我等か家の曩祖渡邊の

網か出生の郷にて此八幡宮産神かもしるへからすと殊に信し拜せし定
名所圖畫或は聖堂に在出来之地誌の類に其ことあるへし歸らは尋へし
○廿五日 曇夕大雷雨 六半時出立に在桶川上尾天神橋大宮浦和を經
宿に至り止宿 わらひ宿入口より雷鳴家來一同到著後大雷雨也
○廿六日 晴 六半時早め之出立に在五時前板橋宿に至る親族其外懇意
之もの等参りたり九ツ時前歸宅也。

64
205

20
205

終